飛驒市文化財調査報告書　第14集

飛驒市遺跡詳細分布調査報告

－古川町・神岡町－

２０１９

飛 驒 市 教 育 委 員 会

飛驒市文化財調査報告書　第14集

ひだしいせきしょうさいぶんぷちょうさほうこく

飛驒市遺跡詳細分布調査報告

ふるかわちょう　かみおかちょう

－古川町・神岡町－

２０１９

飛 驒 市 教 育 委 員 会

序

岐阜県の最北端に位置する飛騨市は、北は富山市、南東は高山市、西は白川村に接し、面積７９２．３１㎢、内、森林が９３％を占める山間地域に、４つの町から成る自治体として、平成３１年３月現在、約２４，０００人の人々が生活しています。

当市には、山の恵みと神通川の支流である宮川と高原川からの恩恵を背景に、数多くの遺跡が残されています。これらの遺跡は、これまでの考古学研究における重要な役割を担ってきました。昨年度は、『飛騨市遺跡地図』を刊行し、古川町と神岡町の遺跡の範囲を示しました。この遺跡地図の公開によって、法令に基づく範囲を明示し、適正な届出等の運用につとめているところです。

さて、今回の「詳細分布調査報告」は、遺跡範囲の根拠を示す資料群を掲載したものです。これにより、当事業が法令に基づく遺跡範囲の明示にとどまらず、遺跡が「ふるさと飛騨市」の貴重な地域資源として、市民の皆様の誇りとなり、文化財保護への関心が高まる一助になることを強く願うものです。

最後となりましたが、詳細分布調査の実施に対しまして深いご理解とご協力をいただいた市民の皆様、そして、本報告書の作成も含めて多大なるご指導・ご支援を賜りました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成３１年３月

岐阜県飛騨市教育委員会

教育長　沖　畑　康　子

例　言

1　本書は、岐阜県飛騨市古川町・神岡町に所在する遺跡の詳細分布調査報告書である。

2　本調査は、開発の事前協議となる『飛騨市遺跡地図』を作成することを目的としたものである。調査及び整理作業は、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金（市内遺跡）を得て、飛騨市教育委員会が実施した。

3　調査は、文化庁文化財第二課（2018年10月までは記念物課）、岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課（2017年3月までは岐阜県教育委員会社会教育文化課）の指導協力のもとに、調査は2010～12、14・15（平成22～24、26・27）年度に、整理作業は2016～18（平成28～30）年度に実施した。

4　本書の執筆は、第3章第1節は大下永、それ以外は三好清超が行った。また、編集は有限会社毛野考古学研究所富山支所に委託し、三好の監督のもと常深尚が行った。

5　調査における作業員雇用の一部を、飛騨市シルバー人材センター、岐阜県シルバー人材センター連合会、㈱イビソク高山支店に委託して実施した。整理作業は直営でも実施したが、出土遺物の洗浄・注記の一部は、㈱イビソク高山支店、実測の一部を㈱イビソク高山支店、㈱上智岐阜支店、遺物トレースの一部を㈲毛野考古学研究所富山支所に委託して実施した。

6　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して実施した。

7　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
アルプス薬品工業株式会社、岐阜県文化財保護センター、栗原神社、寿楽寺、千光寺、洞雲寺、殿圓城寺、古川小学校、吉田区
石原さとみ、内堀信雄、大下大圓、大坪正博、大坪洋子、大坪良郎、掛尾義昭、加藤朋史、蒲助四郎、河合英夫、菊田茂子、佐伯哲也、住田裕幸、立田秀士、谷口　茂、谷口辰夫、田近善彦、田中幸子、都竹清隆、栃本和孝、中井　均、野村孝司、野村徳雄、長谷川幸志、羽根坂恭央、船坂良孝、古田勝之、三島　誠、三井　登、本永義博、柳坪武志、山内紀子、山下久雄、吉朝則富、若田義隆

8　所収遺跡は、『飛騨市遺跡地図』（飛騨市教育委員会、2018）によるため、あわせて参照されたい。

9　遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄2007『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

10　調査記録及び出土遺物は、飛騨市教育委員会で保管している。

目　次

序・例言
目次
第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 3
第２章　調査成果 …… 5
　第１節　環　境 …… 5
　第２節　古川町内の遺跡 …… 5
　第３節　神岡町内の遺跡 …… 111
第３章　総　括 …… 203
　第１節　史跡江馬氏城館跡と傘松城跡の位置づけ …… 203
　第２節　遺跡の変遷 …… 236
引用・参考文献 …… 242
写真図版・報告書抄録
奥付

挿図目次

第１図　調査範囲図 …… 1
第２図　大洞平古墳遺物実測図 …… 6
第３図　岡前遺跡遺物実測図（1） …… 8
第４図　岡前遺跡遺物実測図（2） …… 9
第５図　岡前奥御堂跡遺物実測図 …… 10
第６図　岡前館跡遺物実測図 …… 11
第７図　上気多遺跡遺物実測図（1） …… 13
第８図　上気多遺跡遺物実測図（2） …… 14
第９図　上気多遺跡遺物実測図（3） …… 15
第10図　上気多上野遺跡遺物実測図 …… 16
第11図　上気多榊岡遺跡遺物実測図 …… 17
第12図　上気多榊岡北遺跡遺物実測図 …… 17
第13図　上野遺跡遺物実測図 …… 19
第14図　上野井西古墳遺物実測図 …… 19
第15図　上野上野遺跡遺物実測図 …… 21
第16図　上野上野東遺跡遺物実測図 …… 22
第17図　上町遺跡遺物実測図（1） …… 25
第18図　上町遺跡遺物実測図（2） …… 26
第19図　上町遺跡遺物実測図（3） …… 27
第20図　上町廃寺跡遺物実測図（1） …… 28
第21図　上町廃寺跡遺物実測図（2） …… 29
第22図　上町廃寺跡遺物実測図（3） …… 30
第23図　黒内古屋敷遺跡遺物実測図 …… 31
第24図　黒内細野遺跡遺物実測図（1） …… 33
第25図　黒内細野遺跡遺物実測図（2） …… 34
第26図　黒内細野遺跡遺物実測図（3） …… 35
第27図　袈裟丸祖父あん遺跡遺物実測図 …… 35
第28図　五阿弥塚古墳遺物実測図 …… 37
第29図　小沼遺跡遺物実測図 …… 38
第30図　御番屋敷遺跡遺物実測図（1） …… 39
第31図　御番屋敷遺跡遺物実測図（2） …… 40
第32図　御番屋敷遺跡遺物実測図（3） …… 41
第33図　御番屋敷遺跡遺物実測図（4） …… 42
第34図　御番屋敷遺跡遺物実測図（5） …… 43

第35図　御番屋敷遺跡遺物実測図（6）……44
第36図　御番屋敷遺跡遺物実測図（7）……45
第37図　沢廃寺跡遺物実測図（1）……48
第38図　沢廃寺跡遺物実測図（2）……49
第39図　下気多川原遺跡遺物実測図　……50
第40図　下野羽根坂古窯跡遺物実測図（1）…51
第41図　下野羽根坂古窯跡遺物実測図（2）…52
第42図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図（1）……54
第43図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図（2）……55
第44図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図（3）……56
第45図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図（4）……57
第46図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図（5）……58
第47図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図（6）……59
第48図　杉崎北野遺跡遺物実測図　……60
第49図　杉崎毘沙門遺跡遺物実測図　……61
第50図　太江遺跡遺物実測図（1）……63
第51図　太江遺跡遺物実測図（2）……64
第52図　太江遺跡遺物実測図（3）……65
第53図　太江遺跡遺物実測図（4）……66
第54図　太江上番場遺跡遺物実測図　……67
第55図　太江上番場東遺跡遺物実測図　……67
第56図　太江釜ヶ洞遺跡遺物実測図　……68
第57図　太江小林遺跡遺物実測図　……68
第58図　太江多度古墳群遺物実測図　……69
第59図　高野光専寺遺跡遺物実測図（1）……71
第60図　高野光専寺遺跡遺物実測図（2）……72
第61図　高野巾ノ上遺跡遺物実測図（1）……74
第62図　高野巾ノ上遺跡遺物実測図（2）……75
第63図　高野巾ノ上遺跡遺物実測図（3）……76
第64図　谷遺跡遺物実測図　……78
第65図　谷宇土遺跡遺物実測図　……79
第66図　種村古墳遺物実測図　……81
第67図　戸市遺跡遺物実測図　……82
第68図　戸市長者跡遺物実測図　……83
第69図　塔ノ腰廃寺遺物実測図（1）……84
第70図　塔ノ腰廃寺遺物実測図（2）……85
第71図　中野大洞平遺跡遺物実測図　……86
第72図　中野トンビヶ洞遺跡遺物実測図（1）…88
第73図　中野トンビヶ洞遺跡遺物実測図（2）…89
第74図　中野宮ヶ洞遺跡遺物実測図　……91
第75図　中野山越遺跡遺物実測図（1）……93
第76図　中野山越遺跡遺物実測図（2）……94
第77図　中野山越遺跡遺物実測図（3）……95
第78図　中野山越遺跡遺物実測図（4）……96
第79図　西ヶ洞廃寺跡遺物実測図　……97
第80図　西之御堂遺跡遺物実測図　……98
第81図　沼町川原遺跡遺物実測図　……99
第82図　沼町竹原遺跡遺物実測図　……99
第83図　沼町日明遺跡遺物実測図　…… 100
第84図　野口辻垣内遺跡遺物実測図　…… 101
第85図　信包上野遺跡遺物実測図　…… 101
第86図　信包上野添遺跡遺物実測図　…… 103
第87図　信包大洞遺跡遺物実測図　…… 103
第88図　信包千島遺跡遺物実測図　…… 103
第89図　信包中原田古窯跡遺物実測図（1）… 104
第90図　信包中原田古窯跡遺物実測図（2）… 105
第91図　信包中原田古窯跡遺物実測図（3）… 106
第92図　古町廃寺跡遺物実測図　…… 109
第93図　東雲遺跡遺物実測図（1）…… 112
第94図　東雲遺跡遺物実測図（2）…… 113
第95図　東雲遺跡遺物実測図（3）…… 115
第96図　東雲遺跡遺物実測図（4）…… 116
第97図　東雲遺跡遺物実測図（5）…… 117
第98図　東雲下野遺跡遺物実測図　…… 118
第99図　遊幡石神社遺跡遺物実測図　…… 118
第100図　跡津遺跡遺物実測図　…… 119
第101図　石神遺跡遺物実測図　…… 120
第102図　内洞遺跡遺物実測図　…… 121
第103図　江馬氏城館跡遺物実測図　…… 122
第104図　柏原遺跡遺物実測図　…… 123
第105図　金森宗貞邸跡遺物実測図　…… 124
第106図　上朝浦遺跡遺物実測図　…… 125
第107図　上小萱井ノ下遺跡遺物実測図（1）… 127
第108図　上小萱井ノ下遺跡遺物実測図（2）… 128
第109図　葛谷洞遺跡遺物実測図　…… 129
第110図　坂巻遺跡遺物実測図　…… 130
第111図　佐古遺跡遺物実測図　…… 131
第112図　塩野遺跡遺物実測図　…… 132

第113図 下麻生野遺跡遺物実測図 …… 133
第114図 下小萱遺跡遺物実測図 …… 134
第115図 下山田遺跡遺物実測図 …… 135
第116図 数河中田遺跡遺物実測図 …… 136
第117図 寺林遺跡遺物実測図 …… 138
第118図 殿遺跡遺物実測図 …… 139
第119図 殿坂口遺跡遺物実測図 …… 140
第120図 梨ヶ根上垣内遺跡遺物実測図 … 141
第121図 梨ヶ根神成遺跡遺物実測図 …… 143
第122図 梨ヶ根下打遺跡遺物実測図 …… 144
第123図 梨ヶ根中垣内遺跡遺物実測図 … 145
第124図 梨ヶ根森屋遺跡遺物実測図 …… 146
第125図 西漆山遺跡遺物実測図 …… 147
第126図 西漆山牧反甫遺跡遺物実測図 … 147
第127図 八幡山城跡遺物実測図 …… 148
第128図 堀之内遺跡遺物実測図 …… 150
第129図 森茂遺跡遺物実測図 …… 151
第130図 やなぎさこ遺跡遺物実測図（1）… 152
第131図 やなぎさこ遺跡遺物実測図（2）… 153
第132図 やなぎさこ遺跡遺物実測図（3）… 155
第133図 やなぎさこ遺跡遺物実測図（4）… 156
第134図 やなぎさこ遺跡遺物実測図（5）… 157
第135図 六郎谷遺跡遺物実測図 …… 158
第136図 割石川巾遺跡遺物実測図 …… 160
第137図 下館跡・高原諏訪城跡等高線地形図 … 204
第138図 高原諏訪城跡主要部等高線地形図 … 205
第139図 土城跡等高線地形図 …… 206
第140図 寺林城跡等高線地形図 …… 207
第141図 政元城跡等高線地形図 …… 208
第142図 洞城跡等高線地形図 …… 209
第143図 石神城跡等高線地形図 …… 210
第144図 傘松城跡等高線地形図 …… 211
第145図 下館跡・高原諏訪城跡赤色立体図 … 212
第146図 高原諏訪城跡主要部赤色立体図 … 213
第147図 土城跡赤色立体図 …… 214
第148図 寺林城跡赤色立体図 …… 215
第149図 政元城跡赤色立体図 …… 216
第150図 洞城跡赤色立体図 …… 217
第151図 石神城跡赤色立体図 …… 218
第152図 傘松城跡赤色立体図 …… 219
第153図 傘松城跡縄張り図 …… 221
第154図 傘松城跡全景（高原諏訪城跡上空より）… 222
第155図 傘松城跡周辺関連要素位置図 … 223
第156図 傘松城跡地区区分図 …… 224
第157図 傘松城跡主郭地区 …… 225
第158図 傘松城跡西尾根地区 …… 227
第159図 傘松城跡北尾根地区 …… 227
第160図 傘松城跡南東尾根地区 …… 228
第161図 傘松城跡南地区 …… 228
第162図 神岡村吉田組絵図面 …… 232
第163図 神岡村吉田組絵図面 関係部分拡大・翻刻文 … 232
第164図 越中東街道画巻（傘松城跡付近拡大）… 233
第165図 傘松城跡主郭地区鳥瞰図（南西方向から）… 233
第166図 傘松城跡西尾根地区鳥瞰図（南西方向から）… 234
第167図 傘松城跡尾根部分 断面図位置図 … 235
第168図 傘松城跡尾根部分 断面図 …… 235
第169図 古川町主要遺跡分布図 …… 237
第170図 神岡町主要遺跡分布図 …… 240

挿表目次

第１表　詳細分布調査の体制 ……２
第２表　詳細分布調査実施年次表 ……３
第３表　古川町内遺跡一覧表（1） …… 161
第４表　古川町内遺跡一覧表（2） …… 162
第５表　神岡町内遺跡一覧表 …… 163
第６表　土器・土製品観察表（1） …… 164
第７表　土器・土製品観察表（2） …… 165
第８表　土器・土製品観察表（3） …… 166
第９表　土器・土製品観察表（4） …… 167
第10表　土器・土製品観察表（5） …… 168
第11表　土器・土製品観察表（6） …… 169
第12表　土器・土製品観察表（7） …… 170

第13表　土器・土製品観察表（8）　…… 171
第14表　土器・土製品観察表（9）　…… 172
第15表　土器・土製品観察表（10）…… 173
第16表　土器・土製品観察表（11）…… 174
第17表　土器・土製品観察表（12）…… 175
第18表　土器・土製品観察表（13）…… 176
第19表　土器・土製品観察表（14）…… 177
第20表　土器・土製品観察表（15）…… 178
第21表　土器・土製品観察表（16）…… 179
第22表　土器・土製品観察表（17）…… 180
第23表　土器・土製品観察表（18）…… 181
第24表　土器・土製品観察表（19）…… 182
第25表　土器・土製品観察表（20）…… 183
第26表　土器・土製品観察表（21）…… 184
第27表　土器・土製品観察表（22）…… 185
第28表　土器・土製品観察表（23）…… 186
第29表　土器・土製品観察表（24）…… 187
第30表　土器・土製品観察表（25）…… 188
第31表　土器・土製品観察表（26）…… 189
第32表　土器・土製品観察表（27）…… 190
第33表　土器・土製品観察表（28）…… 191
第34表　土器・土製品観察表（29）…… 192
第35表　土器・土製品観察表（30）…… 193
第36表　土器・土製品観察表（31）…… 194
第37表　石器・石製品観察表（1）　…… 195
第38表　石器・石製品観察表（2）　…… 196
第39表　石器・石製品観察表（3）　…… 197
第40表　石器・石製品観察表（4）　…… 198
第41表　石器・石製品観察表（5）　…… 199
第42表　金属製品観察表　…… 199
第43表　ガラス製品観察表　…… 199
第44表　瓦観察表（1）…… 200
第45表　瓦観察表（2）…… 201
第46表　瓦観察表（3）…… 202
第47表　飛騨市内の主な城館名（記録・報告より）… 229
第48表　飛騨市内の城館名由来整理表　… 231

写真図版目次

図版１　杉崎狐ヶ洞古墳群　踏査の様子
中野山越古墳群　確認状況
中野山越古墳群　石室確認状況１
中野山越古墳群　石室確認状況２
図版２　信包中原田古窯跡　遺物散布の様子
野首遺跡　踏査の様子
上朝浦遺跡　踏査の様子
柏原遺跡　聞き取りの様子
堀之内遺跡　聞き取りの様子
図版３　大洞平古墳群遺物
岡前館跡遺物
岡前遺跡遺物
図版４　上気多遺跡遺物
図版５　上町廃寺跡遺物
黒内細野遺跡遺物
図版６　五阿弥塚古墳近辺遺物
図版７　御番屋敷遺跡遺物
図版８　沢廃寺跡遺物
下野羽根坂古窯跡遺物1
図版９　下野羽根坂古窯跡遺物2
図版10　寿楽寺廃寺跡遺物
図版11　太江遺跡遺物
太江多度古墳群遺物
高野巾ノ上遺跡遺物
谷遺跡遺物
図版12　種村古墳遺物
中野トンビヶ洞遺跡遺物
図版13　中野山越遺跡遺物
図版14　信包上野遺跡ヵ遺物
東雲遺跡遺物1
図版15　東雲遺跡遺物2
図版16　やなぎさこ遺跡遺物

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

事業実施にいたる経緯　飛騨市は、2004（平成 16）年に合併して誕生した。合併前に照会業務で主に利用していたのは、1990（平成 2）年に岐阜県教育委員会が刊行した『岐阜県遺跡地図』である。古川町 147 遺跡、河合村 38 遺跡、宮川村 30 遺跡、神岡町 62 遺跡、合計 277 遺跡が登録され（岐阜県教委 1990）、合併後もそれが引き継がれた。

一方で、届出件数は合併後に数件であったが、少しずつ増えていく。しかしながら、担当部署の体制と遺跡情報の公開が追いつかず、2007（平成 19）年に無届工事の案件が発生した。その際に岐阜県教育委員会から、包蔵地と届出等の周知に取り組むよう指導を受けた。

飛騨市教育委員会では、それまで建築確認申請の回覧を受けて遺跡範囲内と想定される場合は対象地の踏査を行う等、照会の度に現地確認を行っていた。それを 2007（平成 19）年の無届工事案件を契機に、市役所内の開発部局と建築確認申請受付窓口に遺跡地図を備え付け、遺跡の場合には即時教育委員会に照会することとした。また、ホームページへの掲載、市内の建設業者への遺跡地図送付、開発の多い上町遺跡等の地区への住民回覧等を実施して周知につとめた。

ここで問題となったのは、当時の遺跡地図で示した範囲は決して精度の高いものではなかったことである。飛騨市教育委員会としては、詳細分布調査を実施していない段階での遺跡地図公開には抵抗感があったが、まず開発行為の事前協議のために誰が見ても客観的に判断できるものを公開した。このような背景の中、適正に埋蔵文化財の保護活用を図るためにも正確な遺跡範囲への改正が急務となった。このため、飛騨市教育委員会では遺跡詳細分布調査を実施することとなった（第 1 表）。

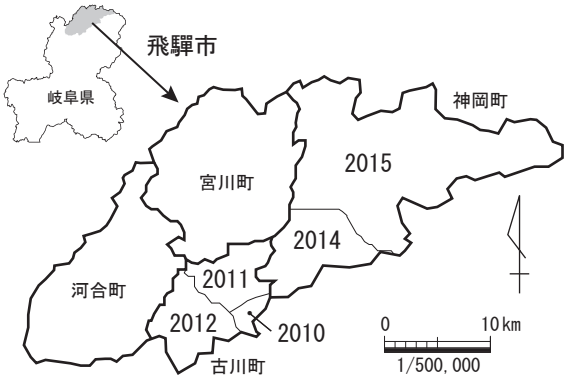
事業計画の概要と変更に伴う調整　史跡江馬氏城館跡の整備事業及び県史跡増島城跡の開発に伴う調査事業が 2009（平成 21）年度に終了するため、同時に準備を開始した。市内で開発行為が多い古川町・神岡町を対象とし、2010（平成 22）年度からの現地踏査 4 ヵ年、整理作業・報告書 1 年の 5 ヶ年計画とした。また、調査期間は雪解け後の 1 ヶ月及び降雪前の 2 ヶ月とした。

しかし、2010（平成 22）年度には岐阜県史跡杉崎廃寺跡での開発に伴う確認調査、2013（平成 25 年）度には個人住宅に伴う本発掘調査 3 件等の急遽対応を迫られる案件や詳細分布調査で想定以上の遺物が採集されたことによる整理作業が伴ったため、事業計画を見直しながら実施することとなった。最終的に、古川町の踏査を 2010（平成 22）～ 2012（平成 24）年度に、神岡町の踏査を 2014（平成 26）・2015（平成 27）年度に、二次整理作業を 2016（平成 28）・2017（平成 29）年度に実施した。2018（平成 30）年 2 月 23 日に『飛騨市遺跡地図』を刊行し、2018（平成 30 年）度末に『飛騨市詳細分布調査報告』を刊行することとなった（第 1 図、第 2 表）。

なお、届出等の件数は、2006 年度 19 件、2007 年度 42 件、2008 年度 25 件、2009 年度 29 件、2010 年 31 件、2011 年度 22 件、2012 年度 28 件、2013 年度 26 件、2014 年度 25 件、2015 年度 30 件、2016 年度 25 件、2017 年度 27 件と、事業期間前後で大きな変化はない。しかし、毎年約 500 人の人口減に関わらず届出等の件数が変化していないため、今後も一定量の開発が見込まれる。この点からも、適正な遺跡範囲を示した遺跡地図を公開する必要性は高まっていったと言える。

第１表　詳細分布調査の体制

年度	教育長	事務局長	課長	課長補佐	係長	担当	整理作業員	作業委託等
2010	松葉正	岩塚泰男	佐藤康雄 （文化振興室長）	－	佐藤直樹	三好清超	－	作業委託 飛騨市シルバー人材センター
2011	山本幸一	藤井義昌	佐藤康雄 （文化振興室長）	－	佐藤直樹	三好清超	（嘱託） 上川渡理絵 （作業員） 中嶋美香 橋本真由美 畠中裕子	直営 下田良一 山越正男 常盤光義 清水登喜男
2012	山本幸一	藤井義昌	田中吉久 （生涯学習課長）	鈴木茂樹	－	三好清超	（嘱託） 上川渡理絵 （作業員） 垣添敦子 中嶋美香 橋本真由美 畠中裕子	派遣委託 岐阜県シルバー人材センター連合会
2013	山本幸一	石腰豊	福永聡 （生涯学習課長）	鈴木茂樹	－	三好清超	（臨時職員） 立道洋子 （作業員） 上川渡理絵 中嶋美香 橋本真由美 畠中裕子	－
2014	山本幸一	石腰豊	福永聡 （生涯学習課長）	鈴木茂樹	－	三好清超	（作業員） 中嶋美香 橋本真由美 畠中裕子	作業支援委託 ㈱イビソク高山営業所 担当：日聖祐輔 一次整理作業支援委託 ㈱イビソク高山営業所 担当：日聖祐輔
2015	山本幸一	石腰豊	清水貢 （生涯学習課長）	鈴木茂樹	－	清水則久 調査担当 三好清超 （総務部税務課）	（作業員） 中嶋美香 橋本真由美 畠中裕子	作業支援委託 ㈱イビソク高山支店 担当：木下慧 一次整理作業支援委託 ㈱イビソク高山営業所 担当：吉村晶
2016	山本幸一	清水貢	森瀬誠 （生涯学習課長）	鈴木茂樹 （～４月）	水口晃	清水則久 調査担当 三好清超 （生涯学習担当）	（作業員） 中嶋美香 橋本真由美 畠中裕子	実測委託 ㈱上智岐阜支店 担当：片山博道
2017	山本幸一	清水貢	大庭久幸 （文化振興課長）	吉實敏良 （～４月）	清水則久	三好清超	（作業員） 中嶋美香 橋本真由美 畠中裕子	実測委託 ㈱イビソク高山支店 担当：吉村晶
2018	沖畑康子	清水貢	大庭久幸 （文化振興課長）	－	清水則久	三好清超	（作業員） 垣添敦子 橋本真由美 畠中裕子	報告書作成支援委託 ㈲毛野考古学研究所富山支所 担当：常深尚



第１図　調査範囲図

第２表　詳細分布調査実施年次表

調査年度	分布調査	整理作業
2010	古川町南東区域	―
2011	古川町北東区域	2010・2011 遺物の一次整理
2012	古川町西区域	2010 ～ 2012 の一次整理
2013	―	2010 ～ 2012 の一次整理
2014	神岡町北区域	2010 ～ 2012・2014 の一次整理
2015	神岡町南区域	2012・2015・2016 の一次整理
2016	―	二次整理作業
2017	―	二次整理作業、遺跡地図作成
2018	―	二次整理作業、報告書作成

第２節　調査の方法と経過

（１）調査の方法

踏査　調査は、考古学的調査である地表面からの遺物採集を主とした。踏査は、古川町教育委員会と神岡町教育委員会が岐阜県遺跡地図作成の際に作成した可能性が高い「埋蔵文化財包蔵地調査カード」（以下、「調査カード」とする）を元に実施することとした。しかし、古川町の地形は盆地を貫流する宮川で形成された平地が広がり、盆地内に新たな遺跡が見つかる可能性があったため、山地以外は全て踏査を行った。

また、土地改良工事が実施された地区はすでに地表面での遺物採集が困難な場合がほとんどであった。このため聞き取りを実施し、過去の工事で遺物が出土した地点の把握、さらに出土品を保管されている場合は借用により資料の記録を行った。なお、遺物は借用を経て寄贈に至った場合もあった。

遺物の採集　一区画に散布する遺物を一括して採集し、番号を付した。採集遺物の点数は、2010（平成 22）年度 1,543 点、2011（平成 23）年度 4,083 点、2012（平成 24）年度 3,949 点、2014（平成 26）年度 638 点、2015（平成 27）179 点、合計 10,392 点であった。

記録作成　踏査や聞き取りの下図には、岐阜県共有空間データによる県域統合型 GIS マップを使用した。遺物採集地点は、簡易 GPS 機器により記録した。また、踏査の記録写真はコンパクトデジタルカメラで撮影した。

絵図その他の資料　遺跡範囲の決定には、遺物の散布状況だけでなく地形の観察や地籍図等を用いた総合的な判断が求められる。今回は、江馬氏城館跡で微地形表現図を作成したほか、傘松城跡で絵図・微地形表現図による検討を行った。他に、寿楽寺廃寺跡で地籍図などの検討を行った（三好 2018b）が、多くの遺跡ではこれらの検討を行うことができなかった。飛騨市では姉小路氏城館跡の調査に伴った歴史地理調査を実施しており、今後の検討で遺跡範囲の変更等が行なわれる可能性がある。

一次整理作業　遺物洗浄・注記・分類を実施した。注記は略号を「飛騨市分布調査」から「ＨＢ」とし、古川町内で 2010（平成 22）～ 2012（平成 24）年度に採集した遺物は、略号ＨＢ・年度の下２桁・通番とした。神岡町内で 2014（平成 26）・2015（平成 27）年度に採集した遺物は、略号ＨＢ・年度の下２桁・採集地点番号とし、遺物が複数ある場合には枝番を付した。注記は機械と手書きを併用した。須恵器の点数計測の際、細片のため器種不明のものは杯か椀の可能性が高いと考え、古代器種として計測した。

二次整理作業　報告書掲載遺物の選別・実測・トレース・編集を実施した。報告書掲載遺物は、遺跡の性格を反映するもの、資料的価値が高いもの、分類別の代表的なものとした。

普及活動　踏査にあたっては無線広報により周知した。事業開始年度の2010年12月広報には特集「地中に埋もれた宝物－遺跡詳細分布調査－」を組み、事業の紹介を行った。『飛騨市遺跡地図』の刊行の際には再び広報ひだで周知した。2016年7月17日、神岡町公民館事業として分布調査体験事業を行い、17名の参加があった。さらに成果の一部について、2019年2月16日、飛騨市神岡図書館において歴史講座「神岡、縄文の実力　こんな場所からこんな土器が！？」と題した報告会を行った。

（２）詳細分布調査作業等の経過

2010（平成22）年度　4月14～30日、古川町南東区域の踏査を飛騨市シルバー人材センターとの作業委託により実施。ドットマップ図の作成。

2011（平成23）年度　10月3日～12月1日、古川町北東区域の踏査を教育委員会直営により実施。ドットマップ図の作成。

2012（平成24）年度　4月12日～25日、10月2日～11月17日、古川町西区域の踏査を岐阜県シルバー人材センター連合会との作業員派遣契約により実施。ドットマップ図の作成。

2014（平成26）年度　4月15日～30日、神岡町北部の踏査を㈱イビソク高山支店への支援業務委託により実施。ドットマップ図の作成。

2015（平成27）年度　6月24日～7月8日、神岡町南部の踏査を㈱イビソク高山支店への支援業務委託により実施。ドットマップ図の作成。

（３）整理等作業の経過

2011～13（平成22～25）年度　2010～2012年度採集遺物の一次整理作業のうち洗浄を直営で実施。

2014（平成26）年度　2014年度採集遺物の一次整理作業を直営で実施。
2010・2011年度の採集遺物の一次整理作業のうち注記・分類・一覧表作成を㈱イビソク高山営業所への支援業務委託で実施。

2015（平成27）年度　2012年度の採集遺物の一次整理作業のうち注記・分類・一覧表作成を㈱イビソク高山支店への支援業務委託で実施。
2015年度採集遺物の一次整理作業を直営で実施。

2016（平成28）年度　2014・2015年度の遺物を中心に報告書掲載遺物の選別を直営で実施し、実測を㈱上智岐阜支店に委託。
2010～2012年度の遺物を中心に報告書掲載遺物の選別を直営で実施。

2017（平成29）年度　2010～2012年度の遺物を中心に報告書掲載遺物の実測を、㈱イビソク高山支店に委託して実施。遺跡範囲を検討し、『飛騨市遺跡地図』を刊行した。

2018（平成30）年度　直営にて実測した遺物のトレース・報告書編集を㈲毛野考古学研究所富山支所に委託して実施。史跡等の測量図を㈱イビソク高山支店に、微地形表現図をアジア航測㈱に委託して作成。『飛騨市遺跡詳細分布調査報告』を刊行した。

※借用遺物の整理作業と実測については、随時直営で実施した。

第２章　調査成果

第１節　環　境

飛驒市は岐阜県最北端に位置し、北は富山県と県境を接し、南と東は高山市、西は白川村と接する。2004（平成16）年２月に古川町・河合村・宮川村・神岡町の２町２村が合併し誕生した。人口は24,269人（2019年１月１日現在）、面積は792.31㎢である。周囲は3,000mを越える北アルプスや飛驒山脈などの山々に囲まれ、市域の93％は山地・森林である。山々の間には小河川や支谷が流れ、神通川水系の宮川や高原川などに注ぐ。これら河川が深いＶ字谷を刻みながら浸食により幾階層もの河岸段丘を形成している。市内唯一のまとまった平地は飛驒市古川町から高山市国府町へ広がる盆地である。

古川町は、市域の南東に位置する。盆地を取り囲む山地は、船津花崗岩類や手取層、濃飛流紋岩により形成される。船津花崗岩類は宮川右岸に広がる。手取層は礫岩・砂岩・頁岩等からなり、盆地北辺において宮川を東西に横切るように分布する。濃飛流紋岩は、大規模な火山活動によって形成された火砕流の堆積物であり、溶結凝灰岩である。岐阜県の３分の１に及ぶ広大な範囲に分布している。

古川町では、中央やや西寄りを南東から北西に宮川が貫流し、また、宮川の支流や渓谷によって山地に向かって幾重にも河岸段丘が形成される。これらの河岸段丘や山麓、盆地に面した山地頂上に、多くの遺跡が分布する（第３・４表）。

神岡町は、高原川とその支流山田川が合流する地点に、すり鉢状に広めの盆地を形成する。河川合流地点からは高原川がＶ字谷を形成して北の日本海側へ流れる。神岡町の盆地への出入りは、この河川に沿った３本の街道が主であるが、山地の尾根を通る街道もあった。中心となる盆地の周辺には高原川・山田川で形成された大小の河岸段丘が点在し、そこに遺跡が立地する（第５表）。

第２節　古川町内の遺跡

１　池之山城跡（遺跡番号21217-06082）

古川町中野に所在し、宮川左岸の盆地に面した山地の尾根先端に立地する。

『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』で、詳細が明らかになっている。それによると、尾根の東西に細長い形状に沿って曲輪が設けられ、その前後に堀切を設けている。盆地側の堀切に土塁を伴い、さらに盆地側に堀切を設けている。盆地への眺望、また小島城跡と野口城跡への眺望が効くこと、向小島城跡と1.6kmしか離れていない立地から、姉小路氏の城郭とされている（岐阜県教委2005）。

踏査でも曲輪等を確認し、中世の城館跡と考えられる。

２　稲荷神社１～３号古墳（遺跡番号21217-00153・00154・06480）

古川町太江に所在し、宮川の支流太江川右岸の山腹に立地する。

『岐阜県史通史編原始』では、稲荷神社社殿の裏に古墳が位置し、ほとんど墳丘を失っており、石

室の上部が、長さ 1.5 m、幅 30 ㎝、高さ 30 ㎝ほど露出していることが記録される。また、天井石は 50 ㎝四方の扁平な石４枚からなるようである（岐阜県 1972）。調査カードでは、この古墳を１号墳とする。2 号墳は 1 号古墳の直下に位置するとし、墳丘頂上部には小社があり、平坦に整地していると記録されている。

踏査では、太江多度古墳の西側の谷を隔てた山腹で、1 ～ 3 号墳の 3 基を確認した。1 号墳は、高さ約 1.5 m、径約 30 mの円墳である。2 号墳は、墳裾部の長径 17.7 m、短径 14.7 m、墳頂部の長径 7.8 m、短径 6.0 m、高さ 3 mの円墳である。3 号墳は、墳裾部径 11 m、墳頂部の径 9.6 mの円墳である。

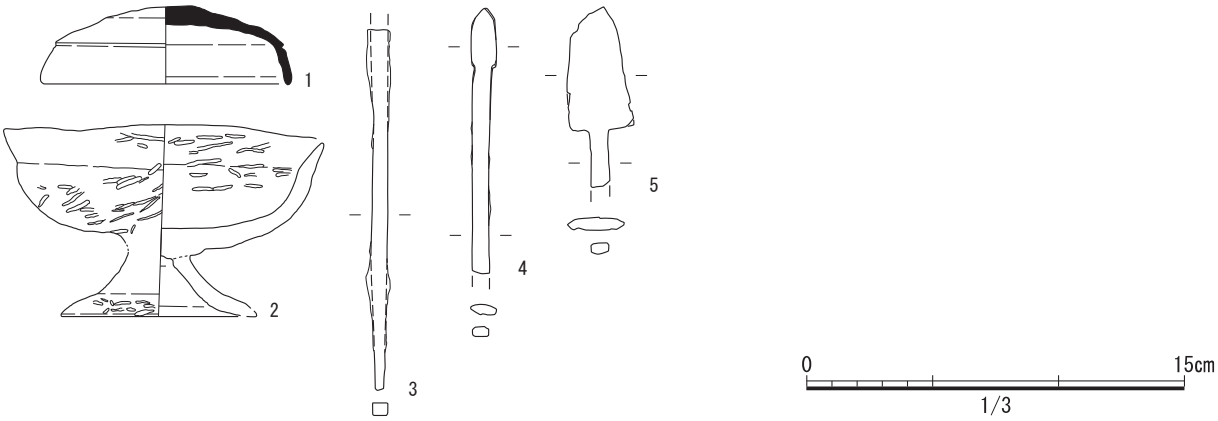
３　大洞平１～５号古墳（遺跡番号 21217-00166・00167・00168・06487・06488）

古川町中野字大洞平に所在し、宮川左岸の山地に立地する。

大洞平 1 ～ 5 号古墳の 5 基からなる。1・2・5 号古墳の 3 基が方墳、3・4 号の 2 基が円墳とされる。

大洞平 1 ～ 3 号古墳は古くから開口していたようであり、多く研究者により紹介されてきた（岐阜県 1972、多賀 1941、菅田 1988、田中 2001、藤井・森島 2013、河合 2015b など）。また、1・2 号古墳は 1960（昭和 35）年岐阜県史跡に指定されているため、測量を行うなどの調査が実施された（大野 1976）。周辺は区民に二ツ塚と親しまれ憩いの場となっており、運動機具が 1 号古墳に隣接する。

1 号古墳は 2 段築成の方墳である。一辺約 20 m、高さ約 5.7 mを測る。両袖式の横穴式石室を有し、奥壁に 2 段の巨石を重ねる。袖石は羨道側が狭く、玄室側が広くなるようにすえられ、断面が台形状を呈する。7 世紀前半頃と位置付けられる。2 号古墳は 1 辺約 22 m、高さ約 6 mの 2 段築成の方墳である。両袖式の横穴式石室を有し、奥壁に 2 段の巨石を重ねる。玄室側壁は 4 ～ 5 段が内傾し、持ち送り形式である。6 世紀末～ 7 世紀初頭と位置付けられている。なお、現在石室へは進入禁止となっている。3 号古墳は上部や周辺が削平され、横穴式石室が剥き出しになっており、現状で墳形は不明であるが、墳裾部径 13.0 m、墳頂部径 6.5 m、高さ 3.5 mは少なくとも古墳の範囲である。墳丘の封土が削り取られ、石室の 3 段石積みの側面及び入口が露出している。石室は南側が開口し、高さ約 1.5 m、幅約 1.4 m、奥行き約 4 mを測る。調査カードによると、封土を削り取った後に杉が植えられ、付近にも石室に使用されたとみられる石があったとのことである。4 号古墳は 2 号古墳の下位段丘、県農道の南側に位置する円墳である。墳裾部の長径 19.5 m、短径 16.0 m、墳頂部の長径 10.5 m、短径 6.5 mを測る。墓地となっている。5 号古墳は、県農道新設に伴い 2002・2003 年度に岐阜県文化財保護



第２図　大洞平古墳遺物実測図

センターにより一部の発掘調査が行われた（㈶岐阜県教育文化財団 2006）。周溝の平面プランから方墳であると確認され、周溝内及び墳丘上から出土した須恵器より古墳時代後期の時期と判明した。現在は6.5ｍ四方の高まりが残る。南側がかつて開口していたと伝わる。

踏査では遺物の採集はなかったが、飛驒の山樵館に「大洞平古墳群」と札が付いた須恵器・土師器が保管されていた。また、「大村組」「向町」などと記載された箱に鉄鏃が収蔵されていた。大村組は大洞平古墳群が位置し、「向町」は五阿弥塚古墳が所在する。これらの古墳出土の鉄鏃は、佐藤泰郷による『千代のかがみ』や『薫菜園集』に記されている（佐藤 1909 ほか）。飛驒の山樵館資料には、これらの図と完全に一致する鉄鏃は無かったが、参考資料として近似する資料を図化した。

1 は須恵器杯Ｈ蓋である。天井部と口縁部の境に一条の凹線が巡り、7 世紀前半代のものと推定される。2 は土師器高杯である。杯部内外面と脚部外面にミガキを施す。3 ～ 5 は鉄鏃である。3 は鏃身部が欠損する頸部から茎部にかけての破片であり、尖根鏃である。頸部の断面形は方形を呈する。4 は尖根鏃の鏃身部から頸部に至る破片である。鏃身部は柳葉形で、関が斜関となる。5 は鏃身部が一部欠損するが、長三角形と推測される有頸の平根鏃である。

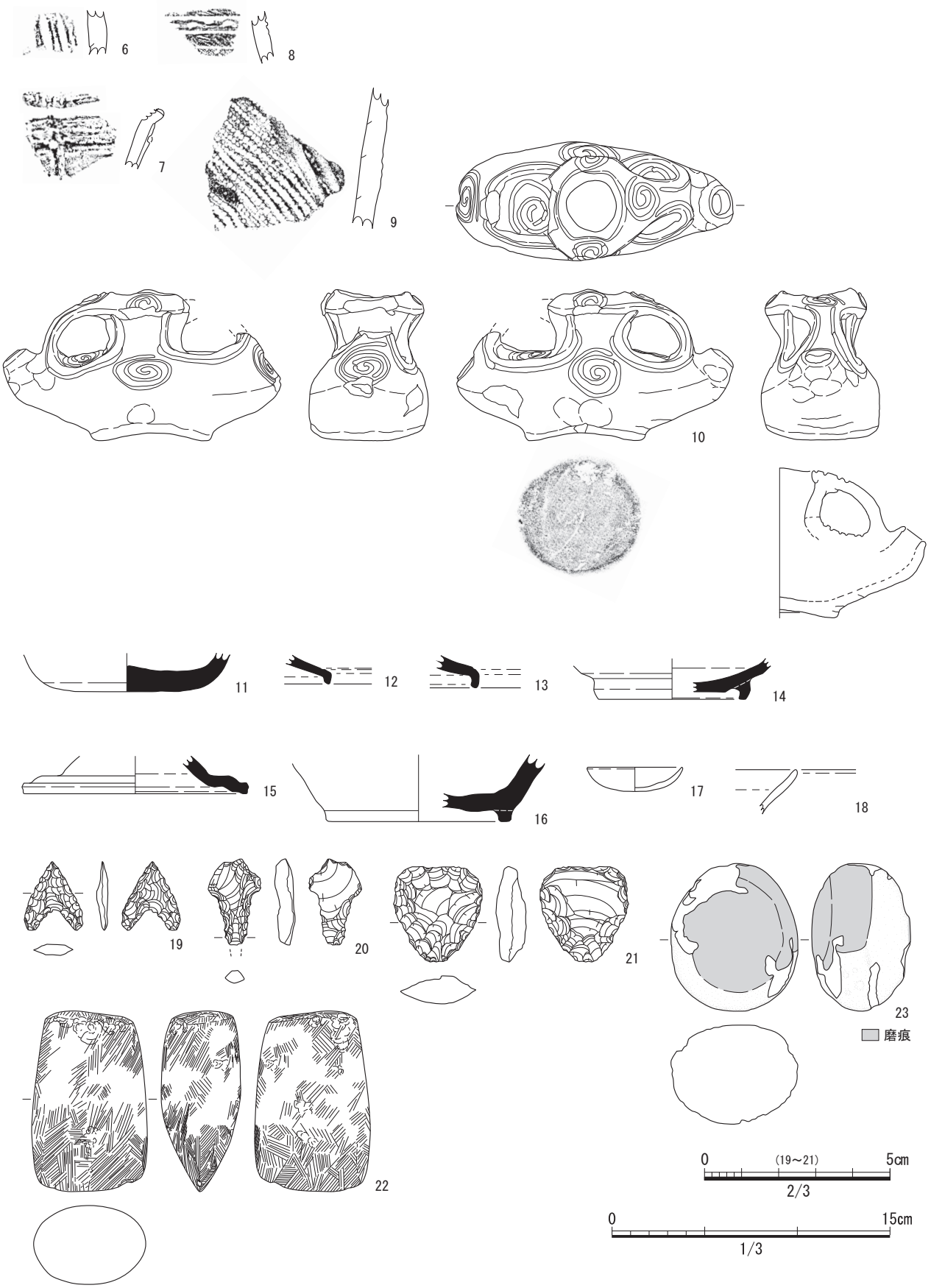
４　岡前遺跡（遺跡番号 21217-00150）

古川町杉崎字御構に所在し、宮川右岸の河岸段丘上に立地する。これまで縄文時代の散布地として登録されていた。当遺跡は、昭和初期には周辺から石冠（赤木 1934a・b）や、土器・土偶・石棒・磨製石斧・石皿（石黒 1936・多賀 1941）が出土したと知られ、現在では異形部分磨製石器や太型蛤刃石斧などの存在も知られる（吉朝 1994・2006）。1994 年に岐阜県により発掘調査が実施され、遺構では縄文時代 7 軒、平安時代 1 軒の竪穴建物跡が確認された。また、遺物は縄文土器早～晩期までで中期後半が主体をなし、須恵器は 8 世紀を主体とする。なお、飛驒で初めて和同開珎が発掘調査で出土した遺跡でもある（㈶岐阜県文化財保護センター 1995）。

踏査では、段丘端部に遺物が散布する状況を確認した。また、遺跡の眼下の河岸段丘には杉崎廃寺跡が位置し、背後の山麓には諏訪神社裏古墳群や杉崎嵯峨山古墳群などが所在することから、古墳時代後期には群集墳を、古代には寺院を営んだ集落の可能性が想定された。

遺物では、縄文土器 174 点、須恵器古墳時代器種 1 点、須恵器古代器種 176 点、土師器古代器種 2 点、灰釉陶器 3 点、瀬戸美濃焼 4 点、その他中世陶磁器等 6 点、近世陶磁器 17 点、近現代陶磁器 1 点、時期不明陶磁器類 11 点、石鏃 2 点、石錐 14 点、楔形石器 8 点、スクレイパー 41 点、UF 等 39 点、剥片 121 点、石核 2 点、磨製石斧 1 点、磨石等 1 点、その他の石製品 4 点、合計 628 点を採集した。その他にも皮袋状注口土器や石冠、太型蛤刃石斧などが伝わる。かつては表土でかなりの遺物が採集できたとの聞き取りもあった。今回は、縄文土器 5 点（6 ～ 10）、須恵器 7 点（11 ～ 16）、土師器皿 2 点（17・18）、石器・石製品 9 点（19 ～ 27）を図示した。

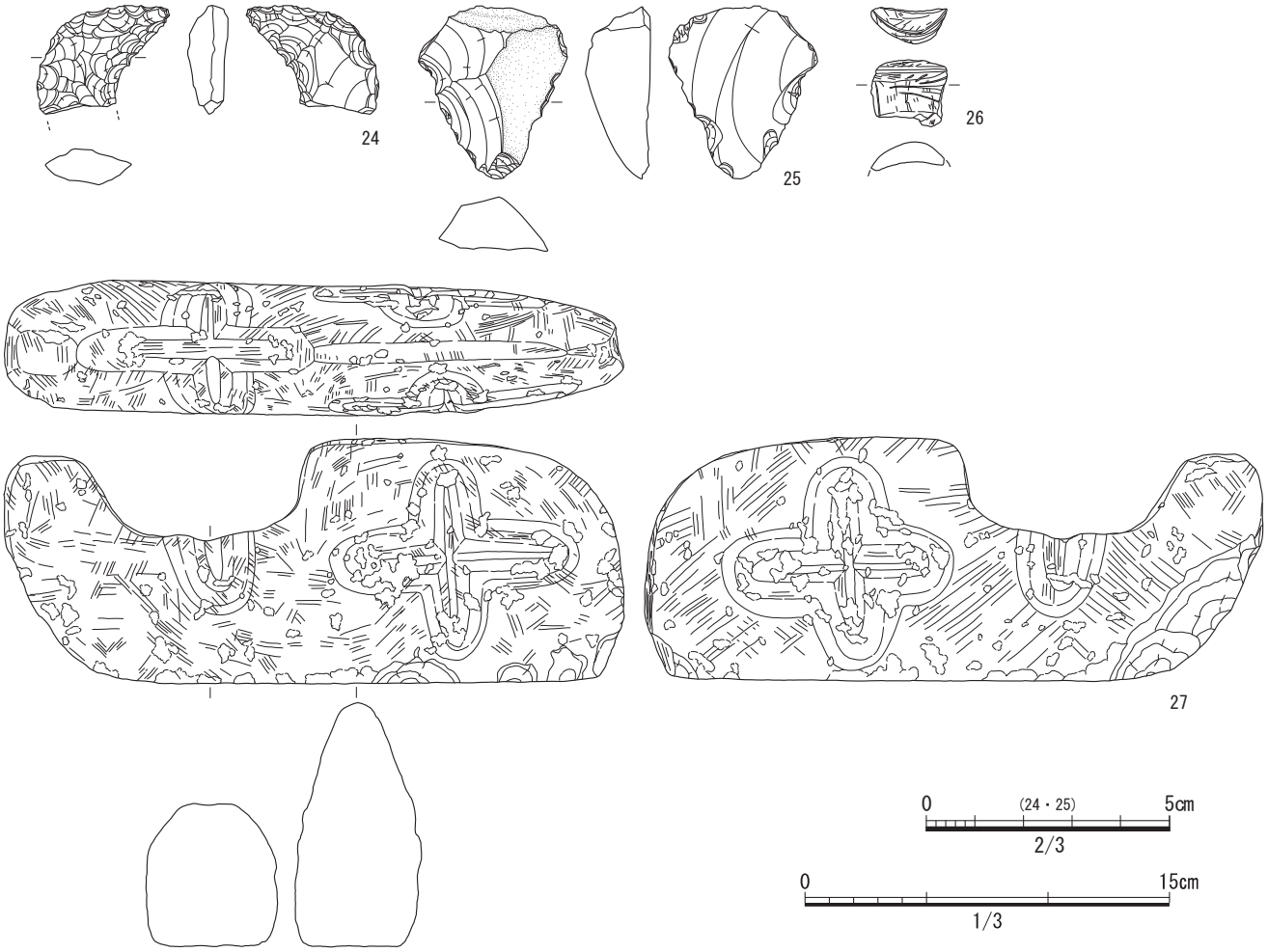
6 は半截竹管状工具による施文があるため縄文時代中期のものと考えられる。7 は、くの字状に屈曲した形状と口縁部から垂下する隆帯と水平の隆帯の交点に円形刺突を施し、堀之内 2 式期の縄文時代後期前葉のものと推定される。8 は屈曲した口縁部破片と推測され、沈線と櫛歯状工具による刺突で施文され、堀之内 2 式期の縄文時代後期前葉のものと推定される。9 は縄文を地文とする。10 の注口土器は把手 1 ヶ所を欠損するものの、ほぼ完形である。口縁部の周囲 4 ヶ所と胴部上面 2 ヶ所、側面 2 ヶ所に沈線による渦巻文を施す。全体に丁寧なナデで仕上げ、注口周辺はユビオサエで成形し



第３図　岡前遺跡遺物実測図（1）

ている。縄文時代後期のものと考えられる。11 は底部の切り離しが回転ヘラ切りであり、須恵器杯 G 身である。12・13 は口縁端部が垂下し、杯 A もしくは杯 B の蓋である。さらに細片のため図示しないが灰釉陶器も採集している。14 は高台が強く内湾し、底部切り離しが回転糸切りであることから、椀 B である。15 は裾部が縁帯状を呈する高杯の脚部である。16 は壺瓶類の底部破片と推測した。17・18 の土師器皿は、ナデで仕上げられた手捏ねのかわらけであり、中世のものである。17 は強く内湾し、18 はゆるく内湾する。19 は石鏃であり、凹基無茎鏃である。20 の石錐は摘み部を有し、錐部が欠損する。21 のスクレイパーは三角形を呈し、三辺を微細に剥離させて使用していた可能性がある。22 は緑色岩類製の太型蛤刃磨製石斧である。製作時か再利用時の敲打痕と研磨痕がよく残る。使い込まれ短くなっている。中部高地からの搬入品であり、弥生時代中期後半のものと考えられる。23 は摩滅が著しい磨石であり、表面に研磨痕がよく残る。24 は屈曲して尖る形状の石器破片である。剥離により作り出された形状であること、また欠損部分は三日月状に続きそうな形状であることから、嘴状石器と考えた。25 は使用時と考えられる刃毀れが認められるためＵＦとした。26 は小型の形状であり、石刀の頭部と推測した。27 の御物石器は完形である。27 の御物石器は敲打の後に研磨を施して、表裏両面と凹部に十字状文を作り出す。

既往調査や採集遺物から、当遺跡は縄文時代・弥生時代・古墳時代後期～古代・中世の集落跡と考えられる。



第４図　岡前遺跡遺物実測図 (2)

５　岡前奥御堂跡（遺跡番号 21217-06511）

古川町杉崎字奥御堂に所在し、宮川右岸の南向き河岸段丘に立地する。

これまで字名を根拠に、中世の寺社跡として遺跡地図に登録されていた。『斐太後風土記』では、宮谷寺の境内にあたり、小島氏衰退の後に廃れたと推測されている（富田 1915）。また、瓦も見つかったとされ、そのことも中世寺院の根拠とされた（多賀 1941）。近年は、刻書須恵器の出土も知られる（竹原 1991b）。

踏査では、岡前遺跡から宮谷を挟む段丘にあり、日当たりもよい好立地であることを確認した。

遺物では、縄文土器２点、須恵器古代器種 14 点、近世陶磁器１点、近現代陶磁器類１点、時期不明陶磁器２点、削器１点、合計 21 点を採集した。今回は、須恵器２点（28・29）を図示した。28 は杯Ｈ蓋、29 は甕の口縁部破片である。遺物から、縄文時代と古代の散布地と考えられる。

６　岡前諏訪神社裏１・２号古墳（遺跡番号 21217-06510・11826）

古川町杉崎字御構に所在し、宮川に注ぐ宮谷に面した丘陵に立地する。

踏査では、1･2 号墳の２基を確認した。１号墳は長径 11 ｍ、短径８ｍほどであり、2 号墳は、長径９ｍ、短径８ｍほどである。

７　岡前館跡（遺跡番号 21217-00046）

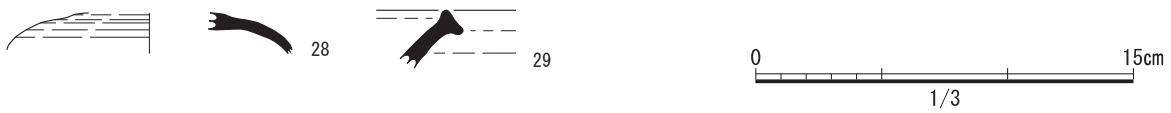
古川町袈裟丸字岡前から杉崎字館にかけて所在し、宮川右岸の河岸段丘上に立地する。

『斐太後風土記』に飛騨国司姉小路氏の館跡としての伝承が記されるように、古くから宮谷川の西側に館跡が位置すると認識されていた（桑谷 1968、富田 1966a、野村 1936）。北東に位置する諏訪神社近くに、現在も姉小路氏の墓と伝わる五輪塔が安置されている。地籍図による調査で、水路で囲まれた４辺を中世の城館跡として登録している（岐阜県教委 2005）。地元の方からの聞き取りでは、過去に北宋銭の景徳元寶（1004 年初鋳）が採集されたとのことである。また、杉崎字館で石冠が出土した記録もある（多賀 1941、高山市教委 1987）。

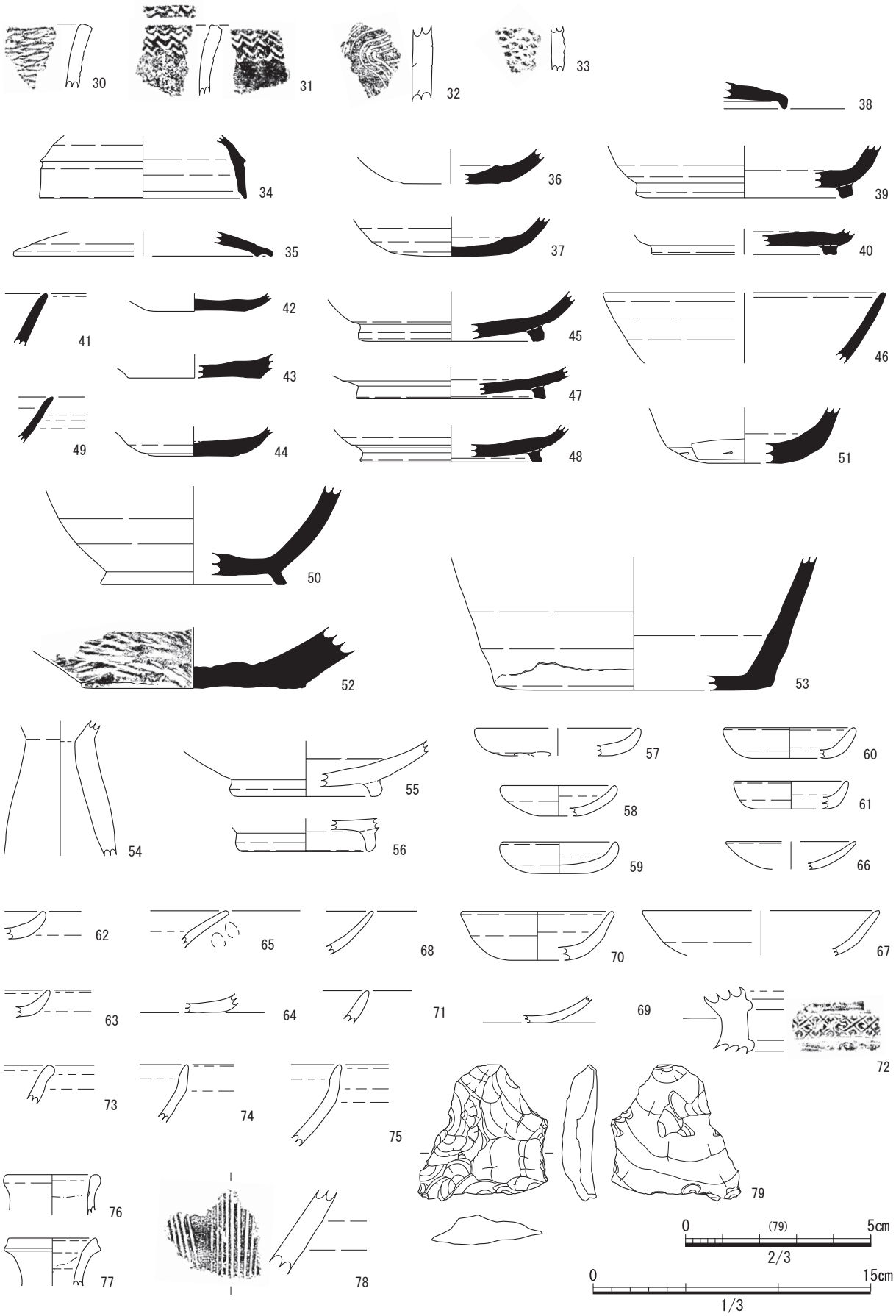
踏査では、登録地の南北を段丘崖で挟まれた河岸段丘上に多くの遺物が散布している状況であった。

遺物では、縄文土器 14 点、須恵器古墳時代器種７点、須恵器古代器種 300 点、土師器古代器種９点、灰釉陶器８点、瀬戸美濃焼 11 点、珠洲焼 18 点、土師器等中世陶磁器等 149 点、近世陶磁器 21 点、時期不明陶磁器 37 点、削器３点、剥片２点、石核１点、瓦２点、合計 582 点を採集した。今回は縄文土器４点（30 ～ 33）、古代の土器類 23 点（34 ～ 56）、中世の土器･陶器類 22 点（57 ～ 78）、石器･石製品１点（79）を図示した。

30 ～ 33 は縄文土器である。楕円押形文・山形押形文があり、縄文時代早期のものである。34 ～ 53 は須恵器である。34 は杯Ｈ蓋で、天井部と口縁部に明瞭な稜を持つ。5 世紀代までさかのぼるものと推定される。35 は返りが短い杯Ｇ蓋、36・37 は杯Ｇ身である。38 は口縁端部が短く垂下した蓋



第５図　岡前奥御堂跡遺物実測図



第６図　岡前館跡遺物実測図

である。39・40は方形の高台を貼り付ける杯Bである。41は杯の外反する口縁部破片である。42・43は底部の切り離しが回転糸切りの椀Aである。44は外反しながら体部が立ち上がる破片であり、椀Aである。45は底部に回転糸切りが遺存し、高台が方形を呈する椀Bである。46は椀の口縁部から体部の破片である。47・48は内湾しながら体部が立ち上がる破片であり、椀と考えた。49は端部がゆるく外反する椀の口縁部片である。50は球形に立ち上がる壺瓶類の体部から底部破片であり、長頸瓶と推測される。51～53は壺甕類の底部破片である。

54は土師器高杯の脚部である。エンタシスの柱状を呈することから古墳時代中期のものと考えられる。55・56の灰釉陶器は三日月形状の高台から9世紀後半のものと考えらえる。

57～71は中世土師器皿、手捏ねのかわらけである。57～64は小形のもので、口縁部をナデにより強く屈曲させる。なお、57・59は同一個体であり、接合する。65～71は全体的に薄手であり、口縁端部をゆるく外反させる。72は瓦器の風炉か火鉢の破片である。73～77は瀬戸美濃焼である。73は平碗、74・75は天目茶碗、76は茶入れ、77は瓶類である。78は近世陶器のすり鉢であり、原体9条以上のすり目を施す。79は右側面が微細に剥離するスクレイパーである。

かねてより中世の伝承が残っていた岡前館跡であるが、土師器皿57～71、天目茶碗74・75、茶入れ76・77などは伝承を裏付ける遺物群の可能性が高い。また、それ以前の時期の遺物もあるため、縄文時代・古墳時代後期から古代にかけての遺物散布地、中世の城館跡と考えられる。

8　落岩城跡（遺跡番号21217-00187）

古川町上野字城山に所在し、古川盆地に面した丘陵山頂に立地する。
『斐太後風土記』に「古城あり」と記される（富田1915）。岐阜県の中世城館跡総合調査では、曲輪と切岸の存在を明示し、古墳と中世墓の存在を示唆する（岐阜県教委2005）。

踏査では曲輪に、3ｍ×1.5ｍ、4ｍ×2ｍ、0.5ｍ×3.5ｍ、3.5ｍ×1.5ｍ、3.7ｍ×1.4ｍ、3.3ｍ×1.9ｍ、3.5ｍ×1.8ｍの7ヶ所の窪みを確認した。これらは古墳に関連する窪みの可能性がある。中世の城館跡と考えられる。

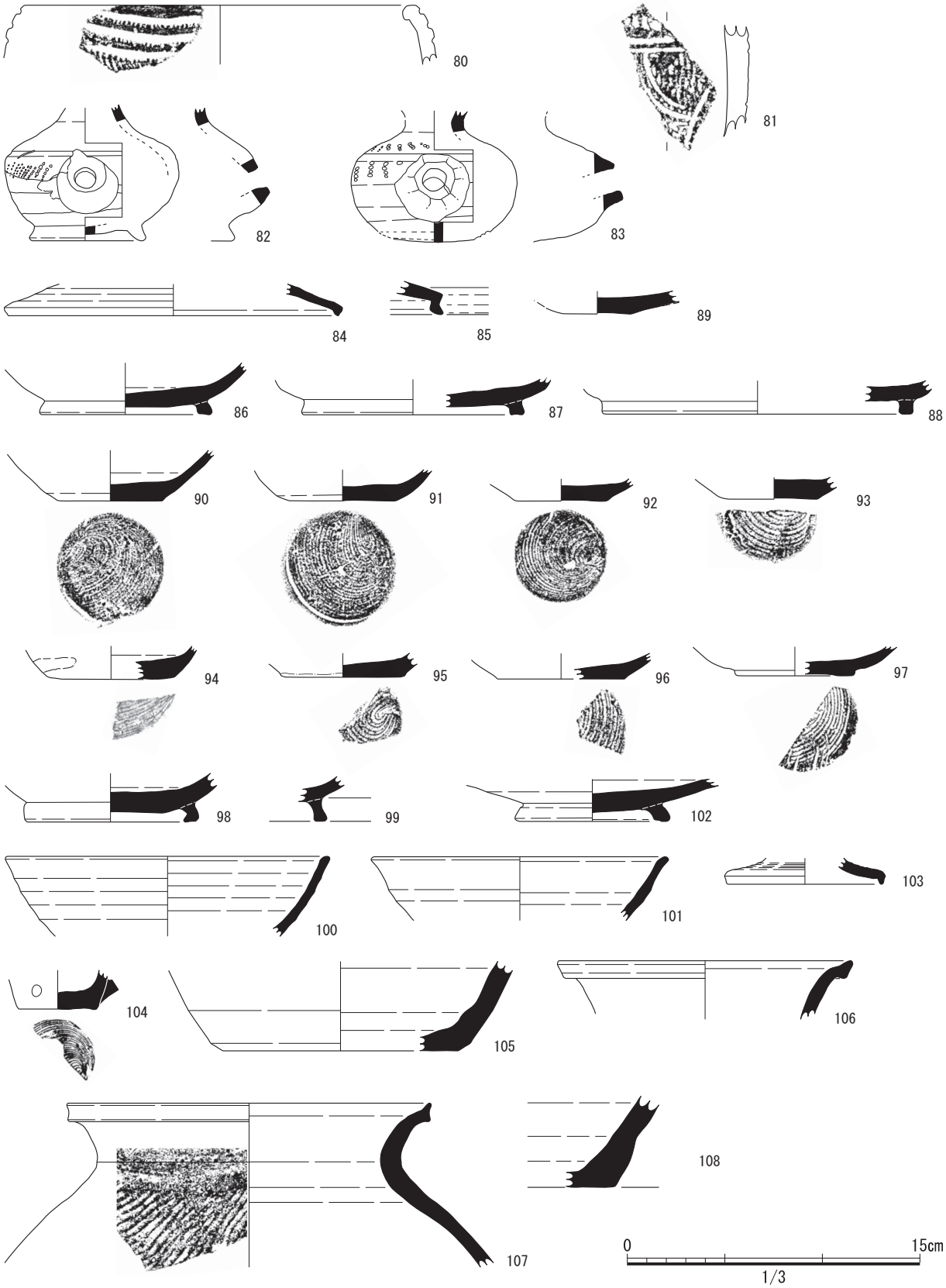
9　上気多遺跡（遺跡番号21217-00193）

古川町上気多字沢に所在し、宮川右岸の南向き山麓緩斜面から高位段丘端部に立地する。戦前から遺物が採集されることが知られていた。岐阜県立吉城高等学校の校舎建設の際に須恵器が発見されたと伝わり、また、段丘端部では炉跡が発見されたと伝わる。さらに、調査カードには、周辺の忠霊塔付近でも縄文・弥生時代の遺物が発見されたとされる。

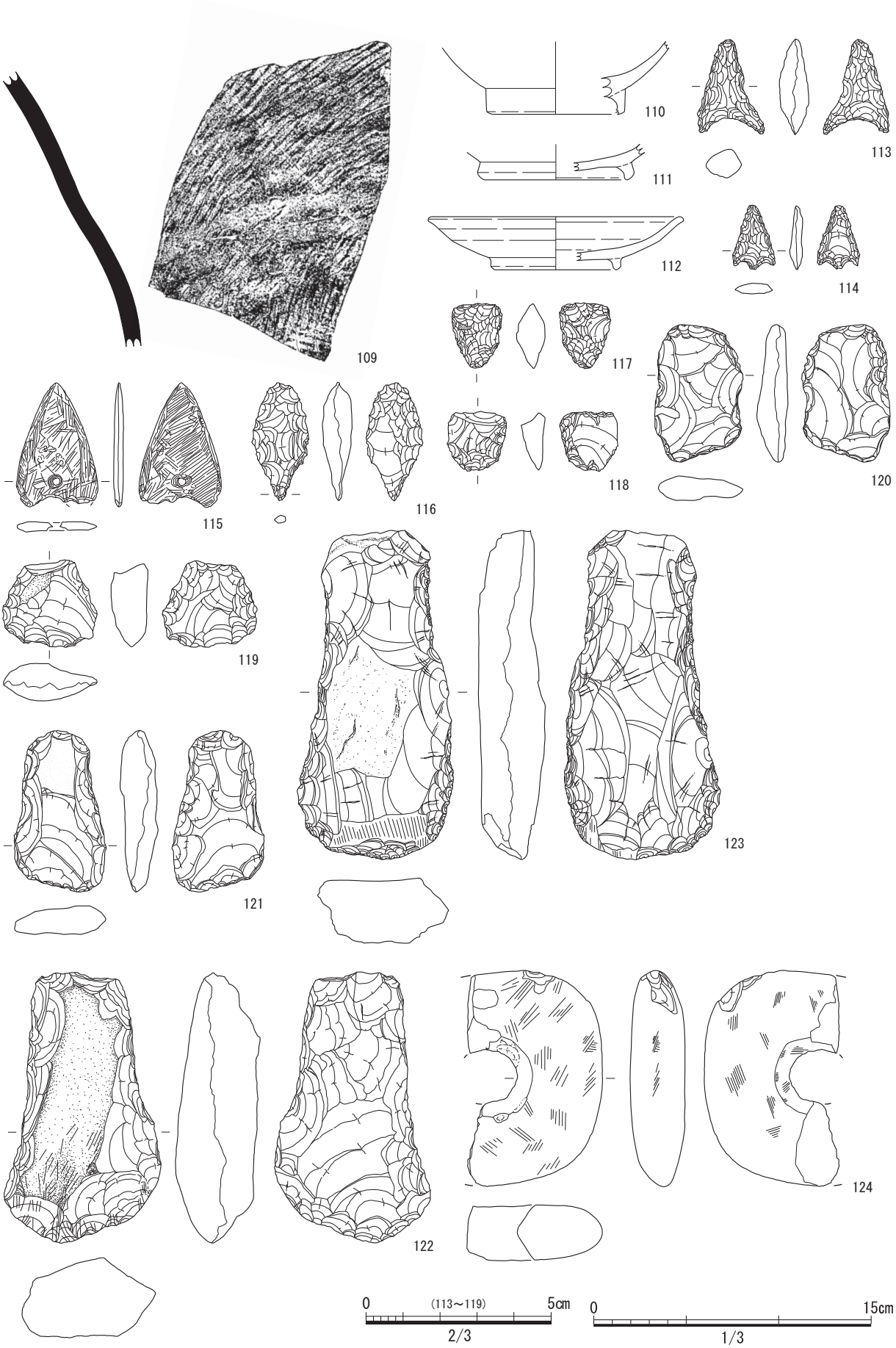
遺物では、縄文土器5点、須恵器古墳時代器種2点、須恵器古代器種344点、土師器古代器種2点、灰釉陶器22点、珠洲焼1点、その他中世陶磁器等1点、近世陶磁器4点、瓦1点、削器1点、打製石斧2点、合計385点を採集した。また、須恵器5点、石器・石製品5点、不明陶器1点の寄贈と、石器1点の借用があった。今回は、縄文土器2点（80・81）、須恵器28点（82～109）、灰釉陶器3点（110～112）、石器・石製品12点（113～124）を図示した。

80は口縁に沿った半隆起線にキザミを施し、胴部に縄文を施す。81は半隆起線の下方に縄文を施し、2条1単位の沈線で施文する。ともに古串田新式から串田新式期であり、縄文時代中期のものと考えられる。82・83は瓻である。ともに胴肩部に凹線を巡らせる。82は凹線の下方に櫛描き列点文

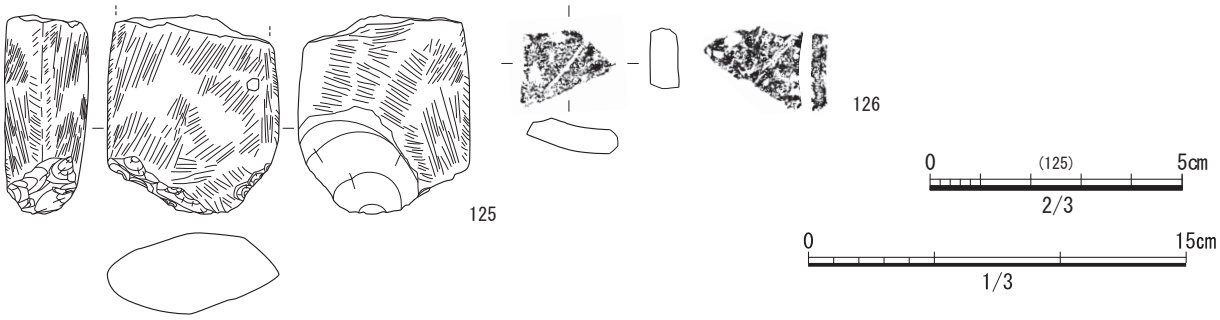
を、83 は凹線の上下に櫛描き列点文を施す。6 世紀後半のものと考えられる。84・85 は蓋の口縁部破片である。86 ～ 88 は杯 B、89 ～ 97 は底部に回転糸切り痕が遺存する椀 A であり、8 世紀後半以



第７図　上気多遺跡遺物実測図 (1)



第８図　上気多遺跡遺物実測図（2）



第９図　上気多遺跡遺物実測図（3）

降のものと考えられる。98・99 は椀 B と考えた。100・101 は内湾する体部の形状から椀とした。102 は皿か盤の可能性がある。103 は端部が垂下する高杯の脚部片である。104 は小型の壺の破片である。106・107 は口縁端部が縁帯状を呈する甕である。108・109 は甕の破片である。110・111 は灰釉陶器の椀、112 は皿である。円形を呈する高台と底部の回転糸切り痕から 9 世紀後半以降のものと考えられる。113・114 は石鏃であり、113 が凹基無茎鏃、114 が凹基有茎鏃である。115 は有孔磨製石鏃である。唯一弥生時代のものであり、過去に遺跡近隣で採集された借用資料である。116 は摘み部を有する石錐である。117・118 は、上下端に剥離が認められる楔形石器である。119 は全体が微細に剥離するスクレイパーである。120 ～ 123 は打製石斧であり、全て表面に自然面を残す。124 は環状石斧である。半分欠損する。125 は石刀の基部破片である。126 は平瓦の小片である。

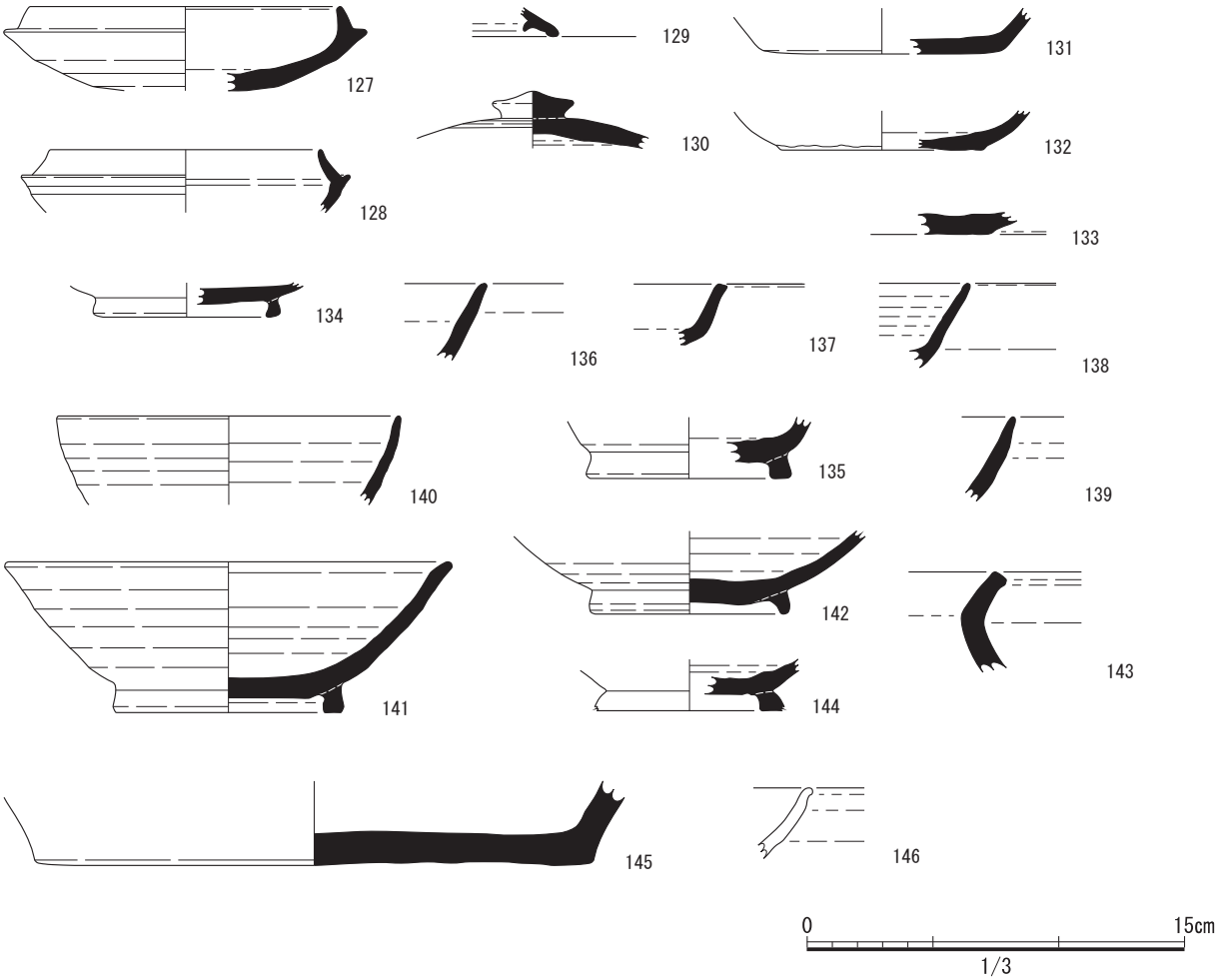
現状では縄文時代・古墳時代後期から古代にかけての遺物散布地と考えられる。過去に縄文時代の遺物と共に炉跡が見つかったとの聞き取りもあったため、今後は集落跡となる可能性もある。また、有孔磨製石鏃 115 は遺跡範囲外から採集されたものであり、遺跡範囲内の採集遺物に弥生時代のものが見られないため、当遺跡に弥生時代を含めないこととする。なお、周辺から見つかったとされる軒丸瓦を気多若宮神社が、「昭和 9 年に上気多字沢で発見」と墨書のある丸瓦を飛騨市教育委員会が所蔵している。これらの瓦片を根拠に、遺跡に北接する吉城高校グラウンドを沢廃寺跡（21217-06086）として遺跡登録している。今回の平瓦 126 も沢廃寺跡に関わるものの可能性が高い。

10　上気多上野遺跡（遺跡番号 21217-11765）

古川町上気多字上野に所在し、宮川右岸山麓の広い谷筋、南西向き緩斜面に立地する。

遺物では、縄文土器 1 点、須恵器古墳時代器種 4 点、須恵器古代器種 132 点、灰釉陶器 7 点、珠洲焼 1 点、その他中世陶磁器等 2 点、近世陶磁器 5 点、合計 152 点を採集した。今回は、須恵器 19 点（127 ～ 145）、灰釉陶器 1 点（146）を図示した。

127・128 は杯 H 身である。127 は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、端部が三角形状を呈する。128 は口縁部が内傾して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。129 は杯 G 蓋である。返りは口縁部より短い。130 は蓋の摘みが擬宝珠形である。131 は杯 G 身である。132・133 は杯 A、134・135 は杯 B である。136 ～ 138 は体部の立ち上がりが外傾気味で直線的であることから、杯の可能性が高い。139・140 も外傾気味に立ち上がる器形から杯と推測される。141・142 は底部に回転糸切りが遺存する椀 B である。9 世紀代のものと推定される。143 は頸部で短く屈曲して口縁部が立ち上がるため、短頸壺とした。144 は高台が外側に踏ん張る形状であり、小型の瓶類とした。146 は灰釉陶器の椀であり、端部が外



第 10 図　上気多上野遺跡遺物実測図

反する。

152 点もの遺物が集中的に散布する一帯は、採集遺物から縄文時代・古墳時代・古代・中世の散布地と考えられる。

11　上気多古墳（遺跡番号 21217-06496）

古川町上気多字榊岡に所在し、古川盆地に面した山腹に所在する。

現在は気多若宮神社社殿が建つ。かねてより本殿の建つ場所が古墳ではないかと考えられていたようである（多賀 1941）。1960（昭和 35）年頃の本殿改修の際に円墳上部が削平され、骨・副葬品が出土したと伝わる（菅田 1987b）。また、調査カードでは同じ場所に埋め戻したとされる。

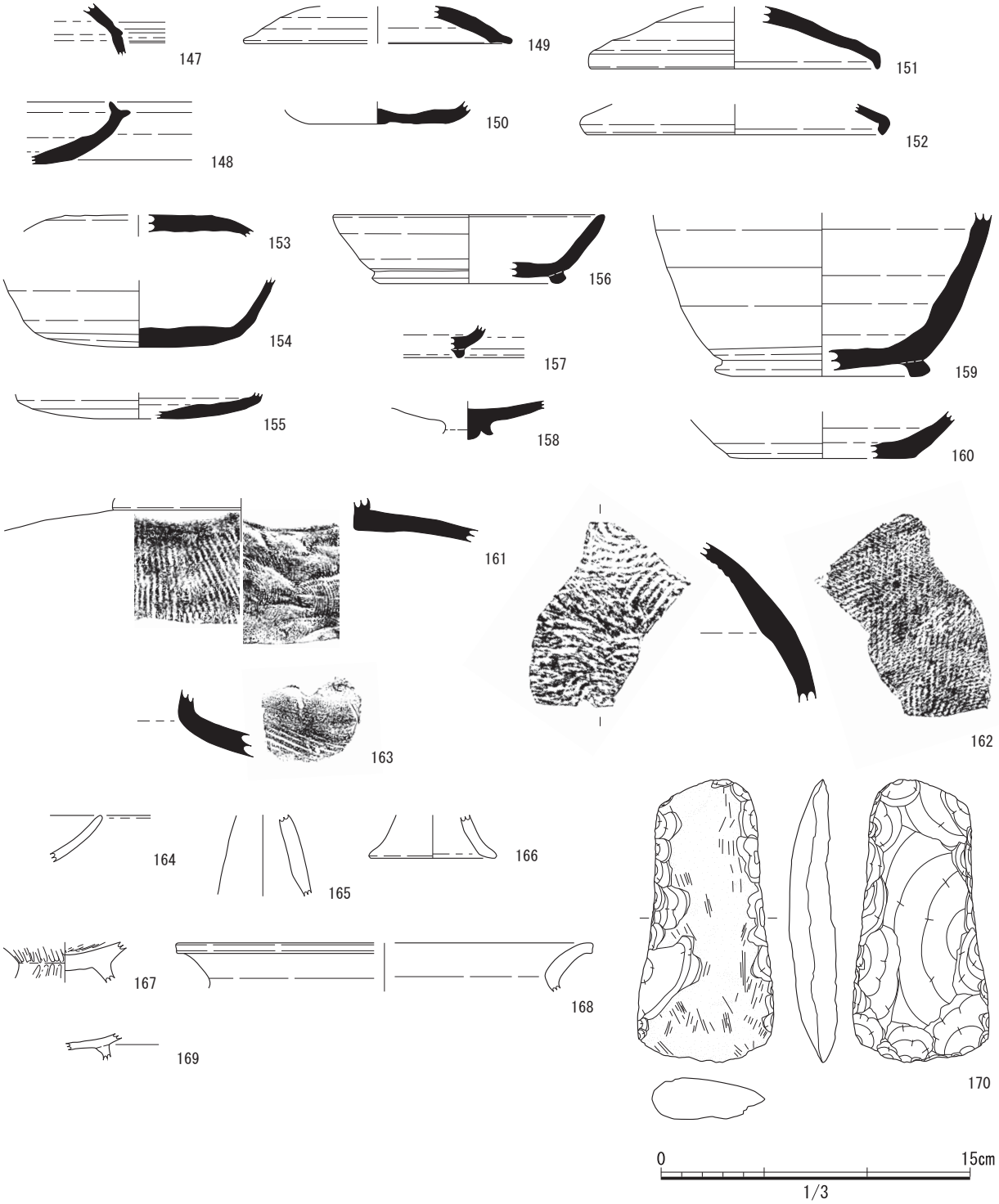
踏査では、墳裾部の長径約 21 m、短径 19 m、墳頂部の長径約 12 m、短径 10 m、高さ 2 mの円錐形の土檀の上に本殿が建つことを確認した。

12　上気多榊岡遺跡（遺跡番号 21217-11766）

古川町上気多字榊岡・上砂に所在し、宮川右岸の南向き山麓緩斜面に立地する。

縄文時代草創期の下呂石製尖頭器が見つかっていることが知られる（吉朝 2001a）。

遺物では、縄文土器 6 点、須恵器古墳時代器種 9 点、土師器古墳時代器種 2 点、須恵器古代器種 179 点、



第 11 図　上気多榊岡遺跡遺物実測図

第 12 図　上気多榊岡北遺跡遺物実測図

土師器古代器種6点、灰釉陶器7点、瀬戸美濃焼1点、その他中世陶磁器等2点、近世陶磁器7点、時期不明陶磁器30点、打製石斧1点、合計250点を採集した。今回は、須恵器17点（147～163）、土師器5点（164～168）、灰釉陶器1点（169）、打製石斧1点（170）を図示した。

147は杯H蓋であり、148は杯H身である。ともに破片であるが、小ぶりの形態に復元できそうであり、7世紀代のものであろう。149は杯G蓋、150は杯G身であり、7世紀後半のものと推定される。154・155は杯Aである。154は底部から体部立ち上がりの腰部にかけて丁寧なヘラケズリを施し、8世紀前半のものと推定される。156・157は杯Bであり、方形の高台が付き、8世紀前半のものと推定される。164～166は土師器高杯である。167は台付甕の脚部破片である。古墳時代のものだが、細片であり年代については判然としない。169は灰釉陶器椀である。その他に、図示しなかったが、瀬戸美濃焼の細片や常滑焼の可能性がある陶器片など中世遺物も採集している。

250点もの遺物が集中的に散布する一画は、採集遺物から縄文時代・古墳時代・古代・中世の散布地と考えられる。なお、須恵器・土師器の古墳時代器種を採集したこと、周辺の工事で古墳石室と思われる巨石が見つかったと伝わることから、当該遺跡の周辺に古墳が存在する可能性もある。

13　上気多榊岡北遺跡（遺跡番号なし）

古川町上気多字榊岡に所在し、宮川右岸の河岸段丘上に立地する。

遺物では、須恵器古墳時代器種4点･古代器種2点、合計6点を採集した。今回は須恵器2点（171･172）を図示した。171は蓋であり、ヘラケズリの後に櫛描き列点文を施す。172は有孔の高盤脚部と考えられる。

採集地点が局地的であり、古墳時代の遺物に限られることから、当遺跡は古墳の可能性がある。しかし、採集遺物が少なく、現況では古墳と判断できる盛土もない。このため、現状では遺跡登録しないこととする。

14　上気多沢1～3号古墳（遺跡番号21217-06497～06499）

古川町上気多字沢に所在し、古川盆地に張り出す丘陵の山腹に所在する。

かつては開口しており､1号墳から金銅製の耳環､2号墳から管玉と土器が出土したとの記録が残り、2号墳は石室内の写真も残っている。（多賀1941・菅田1988）。小口積みの横穴式石室と判断され、6世紀中頃の年代と考えられている（河合2015b）。

踏査では、尾根上に1～3号墳を確認した。1号墳は円墳である。墳裾部で径15.0ｍ、墳頂部で長径14.0ｍ、短径8.0ｍ、高さ2.6ｍを測る。墳頂部中央が径4.5ｍほどの円形に窪む。2号墳は円墳である。墳裾部で長径約11.5ｍ、短径10.0ｍ、墳頂部で長径6.0ｍ、短径5.0ｍを測る。墳頂部が少し削られる。3号墳は円墳である。墳裾部で長径20.0ｍ、短径18.0ｍ、墳頂部で長径9.0ｍ、短径8.0ｍ、高さ3.0ｍを測る。南西部4分の1が長さ7.6ｍにわたり削られている。

15　上野遺跡（遺跡番号21217-00186）

古川町上野字上野に所在し、宮川左岸の北東向き山麓緩斜面に立地する。

現状は荒れた畑地であり、遺物は採集できなかったが、これまでの耕作の際に採集された遺物の寄贈を受けた。今回は、縄文土器2点（173・174）、須恵器1点（175）、山茶碗2点（176・177）、平瓦

1 点（178）を図示した。

173 は縦位隆帯による施文と強く内湾・内傾する口縁部の形状から信州系の縄文時代中期前半のものと考えられる。174 は底部内面に縄文を施す。底部外面は無文である。175 は須恵器盤である。176・177 は灰釉陶器椀である。高台断面が方形である。176 の高台内はヘラケズリ、177 は回転糸切りが残る。178 は平瓦片で、凸面には平行太タタキ痕が残る。

寄贈遺物には、縄文土器、須恵器と瓦片、灰釉陶器があり、縄文時代･古代の散布地と考えられる。

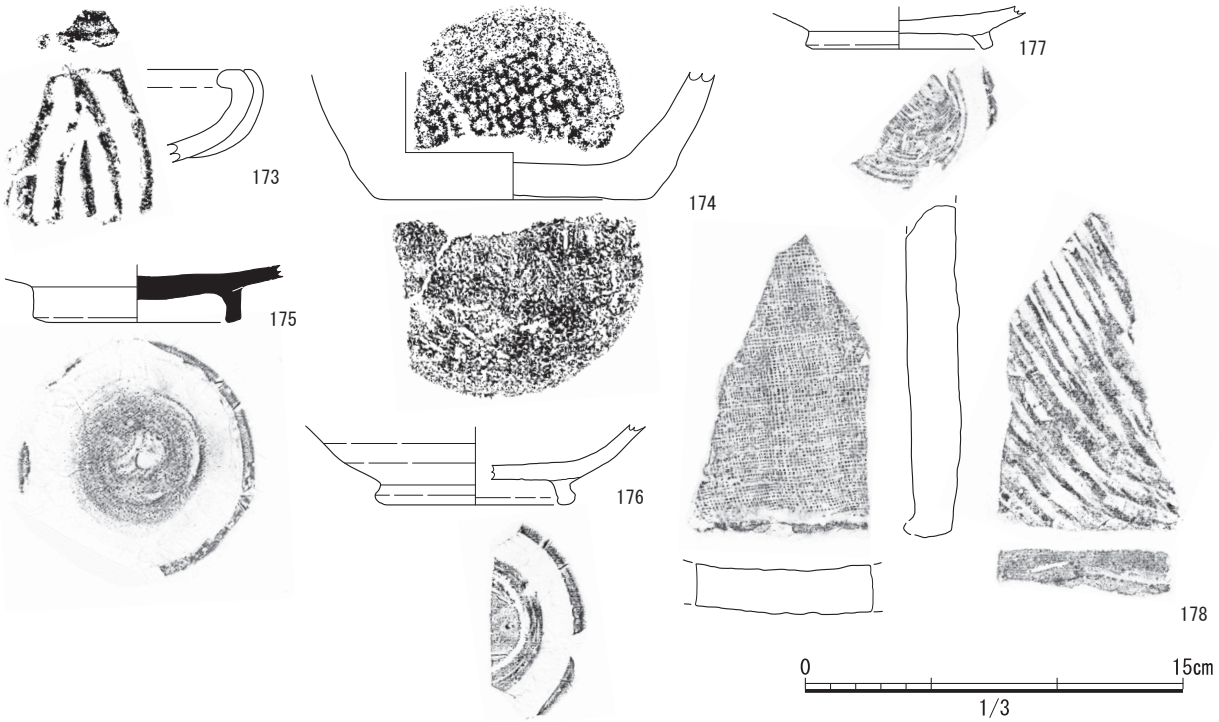
16　上野井西 1 ～ 23 号古墳（遺跡番号 21217-06549 ～ 06555・11797 ～ 11812）

井西古墳群は、古川町上野字井西に所在し、宮川左岸の山腹に立地する。

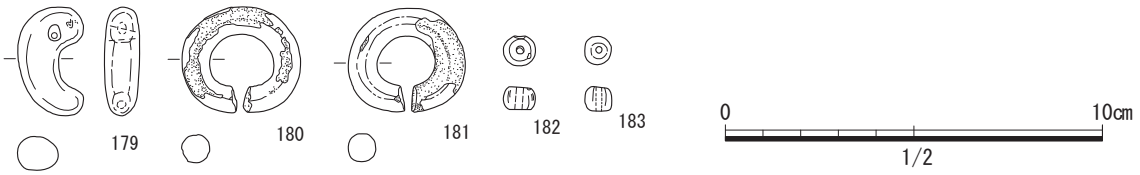
調査カードでは 7 基の古墳とされたが、踏査では 1 ～ 23 号墳を確認した。

1 号墳は円墳である。墳裾部で長径 14.5 m、短径 12.6 m、墳頂部で径 6.0 mを測り、高さ 2.8 m である。

2 号墳は円墳である。墳裾部で長径 10.5 m、短径 7.0 m、墳頂部で径 5.0 mを測り、高さ 3.5 mである。南側に崩れている。



第 13 図　上野遺跡遺物実測図



第 14 図　上野井西古墳遺物実測図

３号墳は円墳である。墳裾部で長径 16.0 m、短径 14.8 m、墳頂部で径 7.0 mを測り、高さ 1.9 mである。墳頂部に径 1.0 mほどの窪みがある。

４号墳は円墳である。墳裾部で長径 18.0 m、短径 17.0 m、墳頂部で長径 7.0 m、短径 6.5 mを測り、高さ 4.1 mである。墳頂部に窪みがある。

５号墳は円墳である。墳裾部で長径 20.0 m、短径 12.8 m、墳頂部で長径 8.5 m、短径 6.0 mを測り、高さ 2.1 mである。西側がサイクリングロードにより削平されている。

６号墳は円墳である。墳裾部で径 23.0 m、墳頂部で長径 11.0 m、短径 9.7 mを測り、高さ 5.3 mである。窪みが２ヶ所あり、最大のものは幅 3.3 mである。

７号墳は円墳である。墳裾部で径 15.0 m、墳頂部で長径 7.0 m、短径 6.5 mを測り、高さ 2.8 mである。墳頂部は平坦である。

８号墳は円墳である。墳裾部で長径 16.0 m、短径 14.0 m、墳頂部で長径 8.0 m、短径 5.8 mを測り、高さ 1.7 mである。

９号墳は円墳である。墳裾部で長径 15.0 m、短径 13.8 m、墳頂部で長径 6.6 m、短径 6.0 mを測り、高さ 3.8 mである。窪みが３ヶ所あり、長径 3.0 m・短径 1.8 m、径 1.3 m、径 0.9 mを測る。

10 号墳は円墳である。墳裾部で長径 16.0 m、短径 14.8 m、墳頂部で長径 7.0 m、短径 6.6 mを測り、高さ 2.2 mである。墳頂部に小さな窪みが２ヶ所ある。

11 号墳は円墳である。墳裾部で径 12.0 m、墳頂部で長径 5.0 m、短径 4.8 mを測り、高さ 1.0 mである。

12 号墳は円墳である。墳裾部で長径 17.3 m、短径 16.0 m、墳頂部で長径 7.5 m、短径 6.5 mを測り、高さ 3.1 mである。墳頂部に長径 3.4 m、短径 1.4 mの窪みがある。

13 号墳は円墳である。墳裾部で長径 11.4 m、短径 10.7 m、墳頂部で長径 5.0 m、短径 4.0 mを測り、高さ 1.8 mである。墳頂部に長径 1.5 m、短径 1.2 mの窪みがある。

14 号墳は円墳である。墳裾部で径 11.0 m、墳頂部で長径 5.3 m、短径 4.5 mを測り、高さ 3.2 mである。墳頂部に長径 1.2 m、短径 0.9 mの窪みがある。

15 号墳は円墳である。墳裾部で径 9.0 m、墳頂部で長径 4.0 m、短径 3.6 mを測り、高さ 2.3 mである。墳頂部に長径 1.0 m、短径 0.9 mの窪みがある。

16 号墳は円墳である。墳裾部で長径 11.0 m、短径 10.8 mを測り、高さ 2.6 mである。

17 号墳は円墳である。墳裾部で長径 12.0 m、短径 11.0 m、墳頂部で長径 5.0 m、短径 4.7 mを測り、高さ 1.5 mである。サイクリングロードにより一部削平を受ける。

18 号墳は円墳である墳裾部で長径 13.5 m、短径 10.0 m、墳頂部で長径 7.0 m、短径 5.0 mを測り、高さ 2.1 mである。円空観音堂の裏に所在し、削平を受けている。

19 号墳は円墳である。墳裾部で長径 13.0 m、短径 12.0 m、墳頂部で径 5.7 mを測り、高さ 2.7 mである。墳頂部に長径 2.0 m、短径 1.8 mの窪みがある。

20 号墳は円墳である。墳裾部で長径 9.6 m、短径 9.0 m、墳頂部で長径 5.4 m、短径 4.0 mを測り、高さ 2.3 mである。墳頂部は長径 4.2 m、短径 3.4 mの大きな窪みがある。

21 号墳は円墳であり、墳裾部で長径 7.3 m、短径 6.5 mを測る。墳頂部に長径 2.0 m、短径 1.0 mの窪みがある。

22 号墳は円墳である。墳裾部で長径 9.5 m、短径 8.0 m、墳頂部で長径 4.4 m、短径 4.3 mを測り、

高さ 2.0 ｍである。墳頂部に長径 1.5、短径 1.4 ｍの窪みがある。

23 号墳は円墳である。墳裾部で長径 11.0 ｍ、短径 9.5 ｍ、墳頂部で長径 6.5 ｍ、短径 4.5 ｍを測り、高さ 9.0 ｍである。墳頂部に長径 1.4 ｍ、短径 0.9 ｍの窪みがある。

遺物は、高山市千光寺に所蔵されていた。採集年月日や千光寺所蔵に至った経緯は不明とのことであるが、「飛騨国吉城郡小鷹利村上野組字井西」と記載されており、上野井西古墳群のいずれかから発見されたものと推測される。これらは、信包八幡神社前方後円墳から出土したものと伝わっていた（丹生川村教委 1990）が、今回の調査で井西古墳群からの出土と判明した。

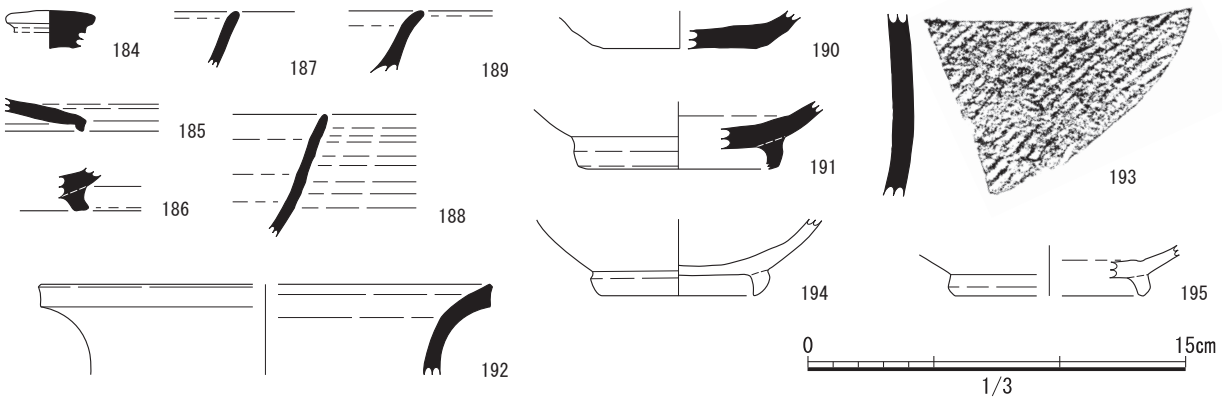
借用遺物は、金銅製耳環 3 点、碧玉製勾玉 1 点、碧玉製管玉 6 点、ガラス製丸玉 2 点、蛇紋岩製丸玉 1 点であった。今回は、勾玉 1 点（179）、耳環 2 点（180・181）、丸玉 2 点（182・183）を図示した。179 は碧玉製の勾玉である。片側より穿孔する。上下双方の端面を研磨で平坦に仕上げる。180・181 の耳環は青銅製のものに鍍金を施す。一部鍍金が剥離している。182･183 はガラス製丸玉である。半透明の濃青色を呈する。どちらも孔と平行方向に気泡が流れているように観察でき、引き伸ばし法により製作されたと推測される。

17　上野上野遺跡（遺跡番号 21217-11767）

古川町上野字上野に所在し、宮川左岸の河岸段丘端部に立地する。

遺物では、縄文土器 2 点、須恵器古墳時代器種 2 点、須恵器古代器種 120 点、灰釉陶器 8 点、瀬戸美濃焼 1 点、近世陶磁器 8 点、近現代陶磁器 2 点、時期不明陶磁器 1 点、剥片 5 点、合計 149 点を採集した。今回は、須恵器 10 点（184 ～ 193）、灰釉陶器 2 点（194・195）を図示した。184 は蓋の、偏平な摘みの破片である。8 世紀前半のものと推定される。185 は蓋の口縁部破片である。186 は杯 B の底部片である。方形の高台が外向きに張り付き、8 世紀前半のものと推定される。187 ～ 189 は杯の口縁部破片である。190 は底部に回転糸切り痕が残る椀 A である。191 の須恵器椀 B 及び 194・195 の灰釉陶器椀は三日月形状の高台を貼り付けるため、9 世紀後半のものと推定される。192 は口縁端部が縁帯状を呈する甕であり、193 は甕の破片である。

149 点もの遺物が集中的に散布する一画は、古代の遺物が他の時代より圧倒的に多い。採集遺物から縄文時代、古墳時代・古代・中世の散布地と考えられる。



第 15 図　上野上野遺跡遺物実測図

18　上野上野東遺跡（遺跡番号 21217-11768）

古川町上野字上野に所在し、宮川左岸の河岸段丘上に立地する。

遺物では、縄文土器１点、須恵器古墳時代器種１点、須恵器古代器種 37 点、灰釉陶器１点、瀬戸美濃焼２点、近代陶磁器１点、楔形石器１点、剥片６点、合計 50 点を採集した。今回は須恵器杯２点（196・197）、楔形石器１点（198）を図示した。196 は底部外面にヘラケズリを施す杯 A である。

50 点もの遺物が集中的に散布する一画は、採集遺物から縄文時代、古代、中世の散布地と考えられる。なお、古代の器種が他の時代の遺物より圧倒的に多い。

19　上野城山１～６号古墳（遺跡番号 21217-00188 ～ 00192・11813）

古川町上野字城山に所在し、古川盆地に張り出した丘陵山頂に立地する。

調査カードでは、墳丘上部の封土が削られて、長さ１m、幅約 30 ㎝、高さ約 50㎝にわたり露出し、中に堆積物があると記録され、人骨、壷、勾玉の出土が伝わるとされる。また、石室が露呈するか、封土が削られている様子が記録されている。

踏査では、落岩城跡の位置する尾根沿いで１～６号墳の６基を確認した。

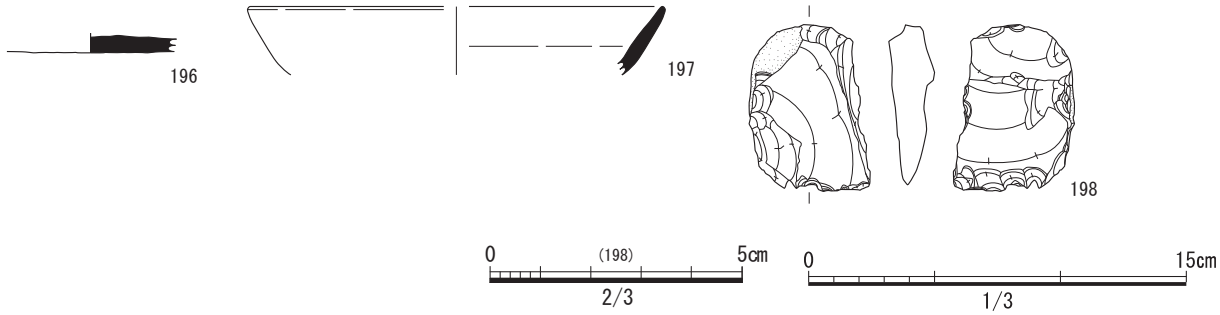
１号墳は円墳である。墳裾部で長径 10.8 m、短径 10.3 m、墳頂部で径５mを測り、高さ 2.8 mである。墳頂部に長径 3.5 m、短径 1.2 mの窪みがある。

２号墳は円墳である。墳裾部で長径 16.5 m、短径 15.0 m、墳頂部長径 7.5 m、短径 7.0 mを測り、高さ 3.3 mである。１号古墳のすぐ南にある。墳丘の頂上には石室の石が抜かれた跡のような方形の窪みが２ヶ所あり、長辺 4.7 m、短辺 1.4 mのものと、長辺 3.5 m、短辺 1.7 mのものである。

３号墳は円墳であり、墳裾部で長径 15.0 m、短径 9.0、墳頂部で長径 8.0 m、短径 4.4 m、高さ 4.8 mを測る。1，２号古墳の地点より、少し尾根を登った地点にある。墳丘の頂上には石室の石が抜かれた跡のような窪みがあり、径 2.0 mを測る。

４号墳は円墳である。墳裾部で長径 13.0 m、短径 11.0 m、墳頂部で長径 6.7 m、短径 5.5 mを測り、高さ 3.7 mである。３号古墳のすぐ南にある。墳頂部に長径 2.0 m、短径 1.0 mの窪みがある。

５号墳は円墳である。3・4 号古墳の地点よりさらに山を登りほぼ頂上付近にある。墳裾部で長径 12.8 m、短径 10.5 m、墳頂部で直径 5.7 m、短径 5.0 mを測る。墳丘の封土が削り取られ、崩壊した石室が露出している。墳頂部の窪みは長径 3.0 m、短径 1.5 mであり、石室は、奥壁と天井部の一部が残存する。近くに天井石であったと見られる長辺 1.8 m、短辺 1.1 mの石材がある。



第 16 図　上野上野東遺跡遺物実測図

6 号墳は円墳である。墳裾部で長径 13.0 m、短径 10.5 m、墳頂部で径 6.0 mを測り、高さ 2.4 mである。墳頂部に窪みがあり、長径 2.3 m、短径 1.4 mを測る。巨石の下に側壁のような石材があり、崩落寸前と見られる。

20　上野梨ヶ洞遺跡（遺跡番号 21217-06548）

古川町上野字梨ヶ洞に所在し、古川盆地に張り出した山麓に立地する。

調査カードでは、縄文時代の遺跡とされる。踏査では荒地となっている状況を確認し、遺物の確認も無かった。

21　上野水上洞１～17 号古墳（遺跡番号 21217-00169 ～ 00185）

古川町上野字水上洞に所在し、古川盆地に張り出した丘陵山腹に立地する。

踏査では、斜面地で１～ 17 号墳の 17 基を確認した。

1 号墳は円墳である。墳頂部径 5.0 mを測り、高さ 0.8 mである。

2 号墳は円墳である。墳頂部径 6.0 mを測り、高さ 1.5 mである。

3 号墳は円墳である。墳頂部径 4.0 mを測り、高さ 3.0 mである。墳頂部が窪む。

4 号墳は円墳である。墳裾部で長径 11.0 m、短径 10.0 m、墳頂部で長径 4.5 m、短径 3.0 mを測り、高さ 2.5 mである。北面に窪みがある。

5 号墳は円墳である。墳裾部で長径 10.0 m、短径 8.0 mを測り、高さ 1.2 mである。墳頂部に径 4 mの窪みがある。

6 号墳は墳形が不整形で分かりにくい。墳裾部で長辺 8.6 m、短辺 6.0 m、墳頂部で長辺 5.0 m、短辺 3.9 mを測り、高さ 1.1 mである。

7 号墳は墳形が不整形で分かりにくいが、円墳と推測される。墳裾部で長径 13.0 m、短径 12.0 mを測り、高さ 1.9 mである。

8 号墳は円墳である。墳裾部で長径 9.5 m、短径 8.0 m、墳頂部で長径 4.0 m、短径 3.0 mを測り、高さ 1.5 mである。

9 号墳は円墳である。墳裾部で長径 13.0 m、短径 12.0 m、墳頂部で長径 8.0 m、短径 6.5 mを測る。墳頂部が陥没する。

10 号墳は円墳である。墳裾部で長径 18.0 m、短径 17.0 m、墳頂部で長径 8.0 m、短径 7.7 mを測り、高さ 4.4 mである。墳頂部が陥没する。

11 号墳は不整形で墳形が分かりにくい。墳裾部で長径 8.6 m、短径 8.0 m、墳頂部で長径 5.0 m、短径 3.9 mを測り、高さ 1.1 mである。

12 号墳は円墳である。墳裾部で径 13.0 m、墳頂部で径 4.0 mを測り、高さ 2.8 mである。墳頂部が小さく窪む。

13・14 号墳は円墳である。15 号墳は窪みがある。16 号墳は平坦であり、墳形が判然としない。

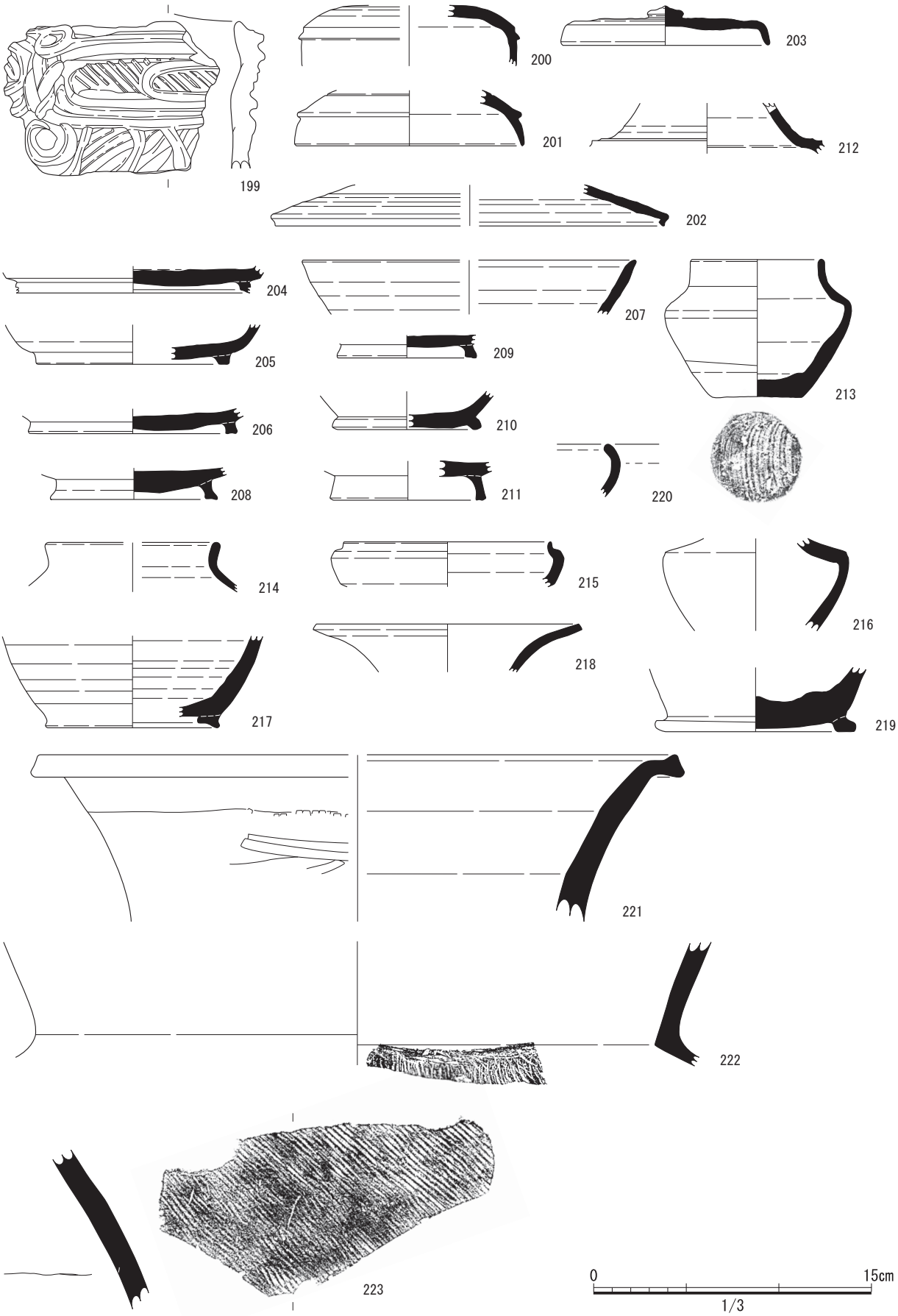
17 号墳は円墳である。墳裾部で長径 9.5 m、短径 8.3 mを測り、高さ 2.8 mである。裾部の下手が削平を受けている。

22　上町遺跡（遺跡番号 21217-06433）

古川町上町、南成町、大野町にかけて所在する。当遺跡は宮川とその支流荒城川に挟まれた沖積地に立地する。南北 1.5 ｋｍ、東西 0.5 ｋｍに及ぶ大規模な遺跡と判明している。1987（昭和 62）年以降、大小あるが 50 次に及ぶ 18,000 ㎡以上の調査を実施している（上町金子地点・氷見地点発掘調査団 2001、上町遺跡Ｃ地点遺跡発掘調査団 1989・1991、上町遺跡トヨタ地点・Ｏ地点・栗原センター地点発掘調査団 1994、飛騨市教委 2013・2016・2018b）。その調査によると、140 軒を超える古墳時代から古代の竪穴建物跡からは古代飛騨でも中心をなした遺跡と捉えられ、11 棟の大型掘立柱建物跡は荒城郡衙の中枢建物と想定されている（河合 2015）。

遺物では、縄文土器 2 点、須恵器古墳時代器種 21 点、須恵器古代器種 1,461 点、土師器古代器種 37 点、灰釉陶器 94 点、瀬戸美濃焼 10 点、珠洲焼 8 点、貿易陶磁 1 点、その他中世陶磁器等 19 点、近世陶磁器 20 点、時期不明陶磁器 14 点、石器・石製品 1 点、瓦 33 点、合計 1,721 点を採集した。その他にも飛騨の山樵館収蔵庫に寄贈資料などが保管されていた。今回は、縄文土器 1 点（199）、須恵器 25 点（200 ～ 224）、灰釉陶器 1 点（225）、八尾焼 1 点（226）、白磁 1 点（227）、打製石斧 2 点（228・229）、太型蛤刃石斧 2 点（230・231）を図示した。

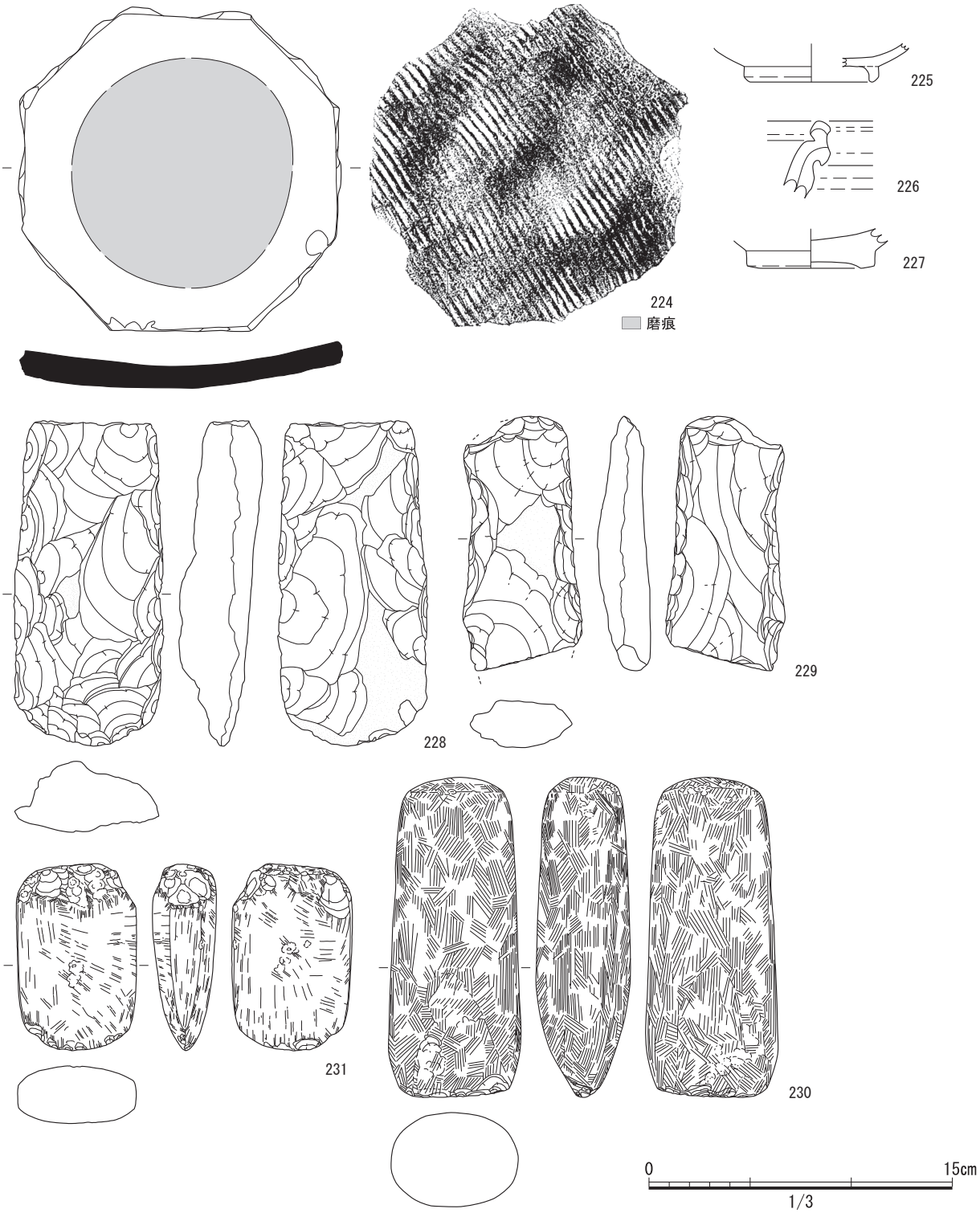
199 は、ねじれ突帯を縦位に施し、隆帯によるＵ字状の区画内にヘラ状工具によるキザミを充填する。信州唐草文系の縄文時代中期のものと推定される。200・201 は杯Ｈ蓋であり、ともに天井部と口縁部の境に明瞭な稜を持つ。200 は稜から口縁部に垂直に下がり、稜の突出している点より 6 世紀前半のものと推定される。202 は口縁端部が垂下する蓋である。203 の蓋は肩が張る器形であり、壺などに伴う蓋と推測される。204 ～ 206 は杯Ｂである。高台断面が方形であり、概ね 8 世紀代のものと推定される。208 ～ 210 は回転糸切りの後に高台を貼り付けた椀Ｂである。209 は高台がやや内傾し、8 世紀前半のものと推定される。211 は高台が高く、内側が内湾し、盤と考えられる。212 は透かしがあり、高杯の脚部と考えられる。213・214 は小型の短頸壺である。215 は鉢としたが、口縁端部が直立する小型の鉄鉢の可能性もある。216 の肩部破片は径が狭く、長頸瓶と推測される。217 は体部に丸みを持ち、ここでは瓶の底部破片としたが、長頸瓶の可能性がある。218 は器壁が薄く、口縁部が強く外反する器形である。長頸瓶の口縁部破片と考えた。219 は壺瓶類の底部破片である。高台が八の字状に付くため、長頸瓶の可能性がある。220 は口縁部が強く内湾し、鉄鉢と考えられる。この遺物は上町廃寺跡に南接する水田で採集したため、古代寺院に関連する遺物と考えられる。221 ～ 223 は大型の甕の破片である。221 は口縁端部に縁帯を有する。224 は甕破片である。八角形に整えられ、内面には磨痕があり、硯として転用されたものと考えられる。225 は灰釉陶器椀である。三日月形状の高台から 9 世紀後半のものと推定される。226 は八尾焼の甕である。口縁端部をＮ字状に折り曲げる。中世の所産である。227 は削り出し高台の白磁盤底部である。228･229 は打製石斧である。229 は表面に自然面を残し、刃部が欠損する。230・231 は緑色岩類製の太型蛤刃磨製石斧である。ともに製作時の敲打痕と研磨痕がよく残る。中部高地からの搬入品であり、弥生時代中期後半のものと考えられる。231 は表裏両面の中央及び基部先端に敲打痕が認められる。使い込まれて短くなった後に敲石として転用されたと考えられる。232 ～ 234 は丸瓦である。凸面はケズリなどでタタキ痕跡は認められないが、234 には指頭圧痕が残る。凹面には 232 のみ輪積み痕跡が遺存する。235 ～ 237 は平瓦である。235 は綾杉状、236 は細い平行、237 は格子状の敲き痕跡が残る。235 には凹面に模骨痕跡が、凸面の側縁に沿って面取りが認められる。232 ～ 237 の瓦資料は寄贈されたものであり、発見



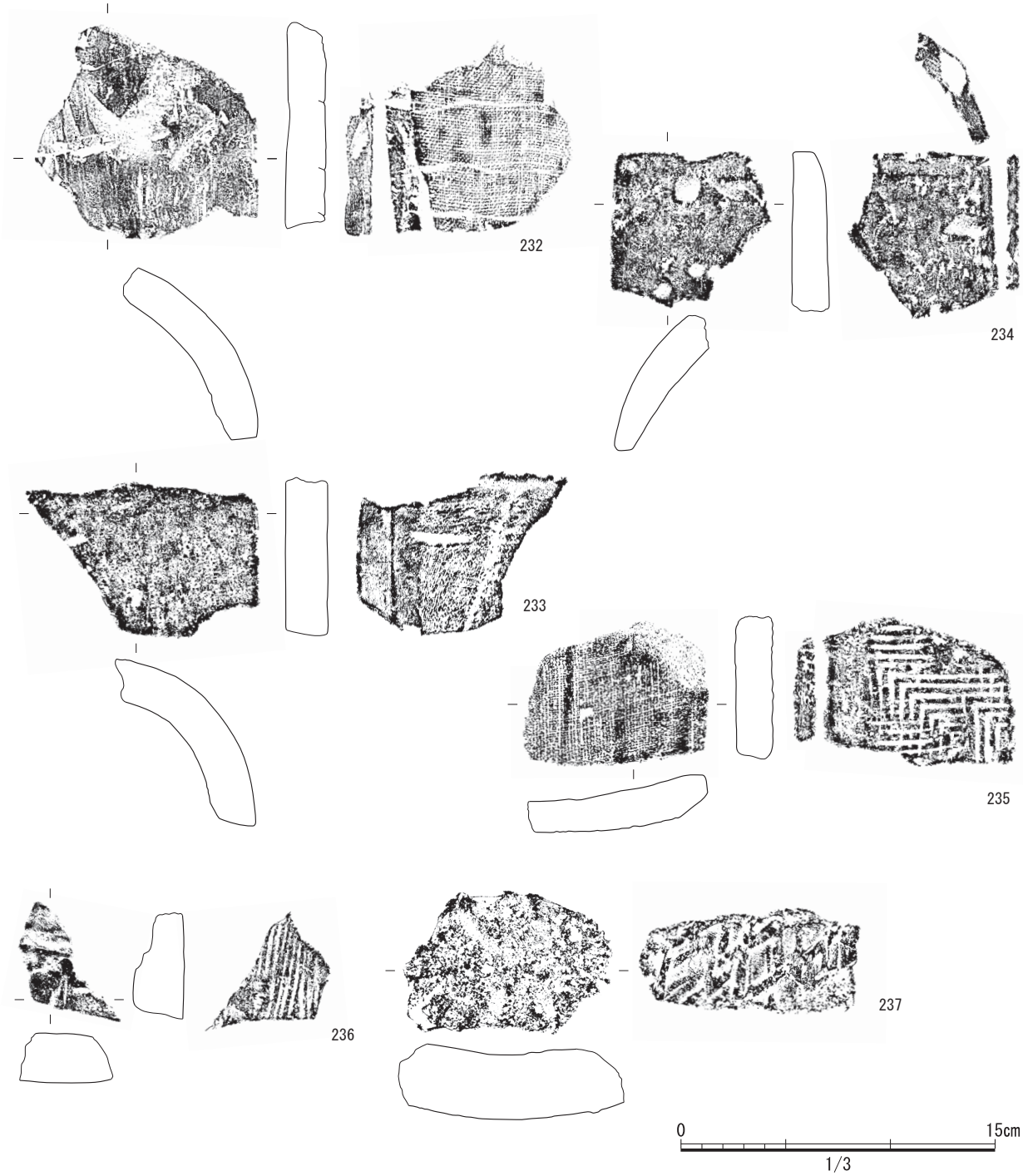
第 17 図　上町遺跡遺物実測図 (1)

地点は 232 と同じく字芹田で、栗原神社から 250 mほど北の地点ということであった。

郡衙を支えたと想定されている大型掘立柱建物跡が存在するものの、中枢域に比定できる建物跡を確認していない。また遺跡内の瓦散布地は、古代寺院の遺跡を別に登録している。これらから、上町遺跡は弥生時代の終末から古墳時代初頭に営みがはじまり、古代においては郡衙に関連する可能性が高い大規模な集落跡となり、8 世紀後半以降衰退しつつも中世まで継続される集落跡と考えられる。



第 18 図　上町遺跡遺物実測図 (2)



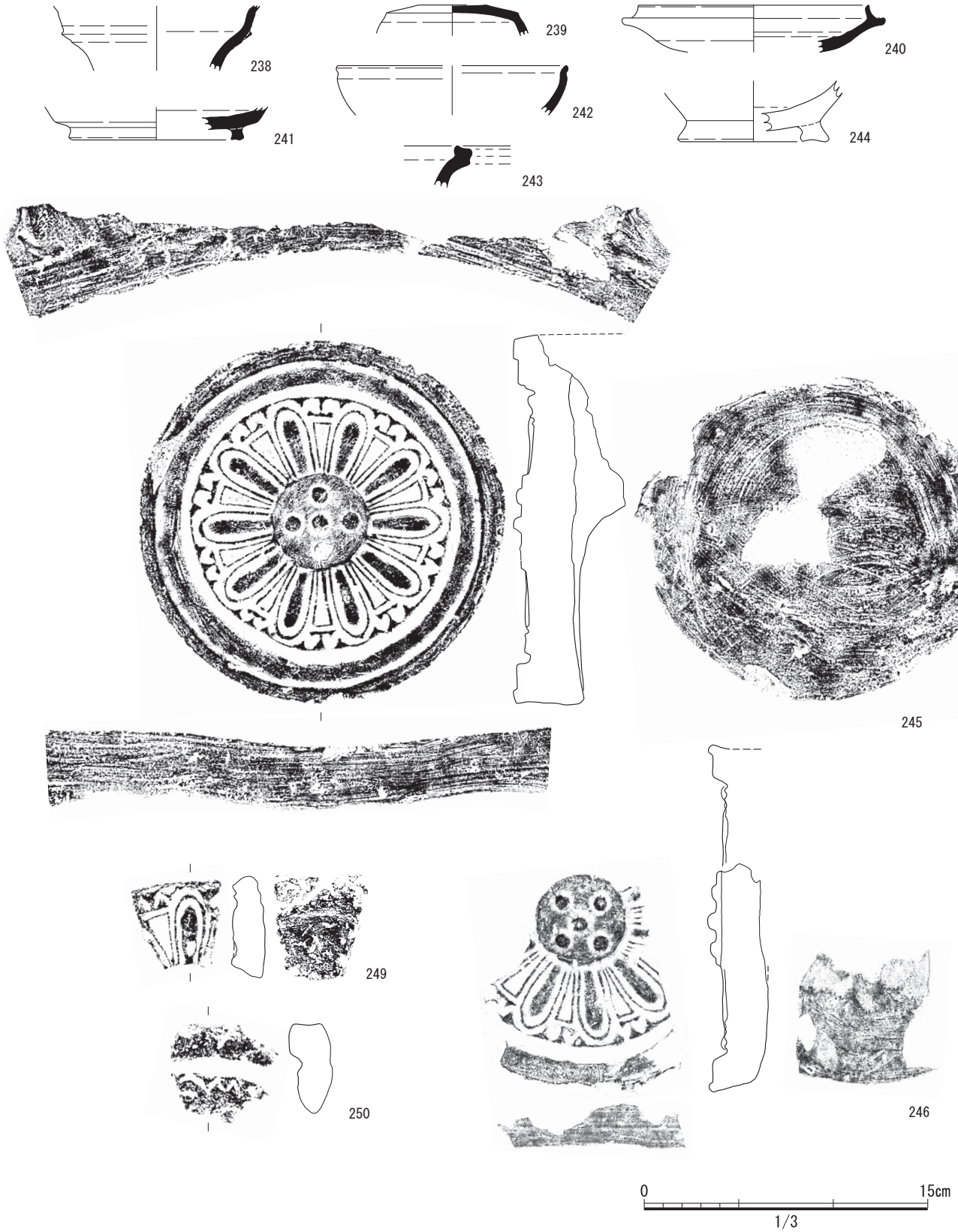
第 19 図　上町遺跡遺物実測図 (3)

23　上町廃寺跡（遺跡番号 21217-06085）

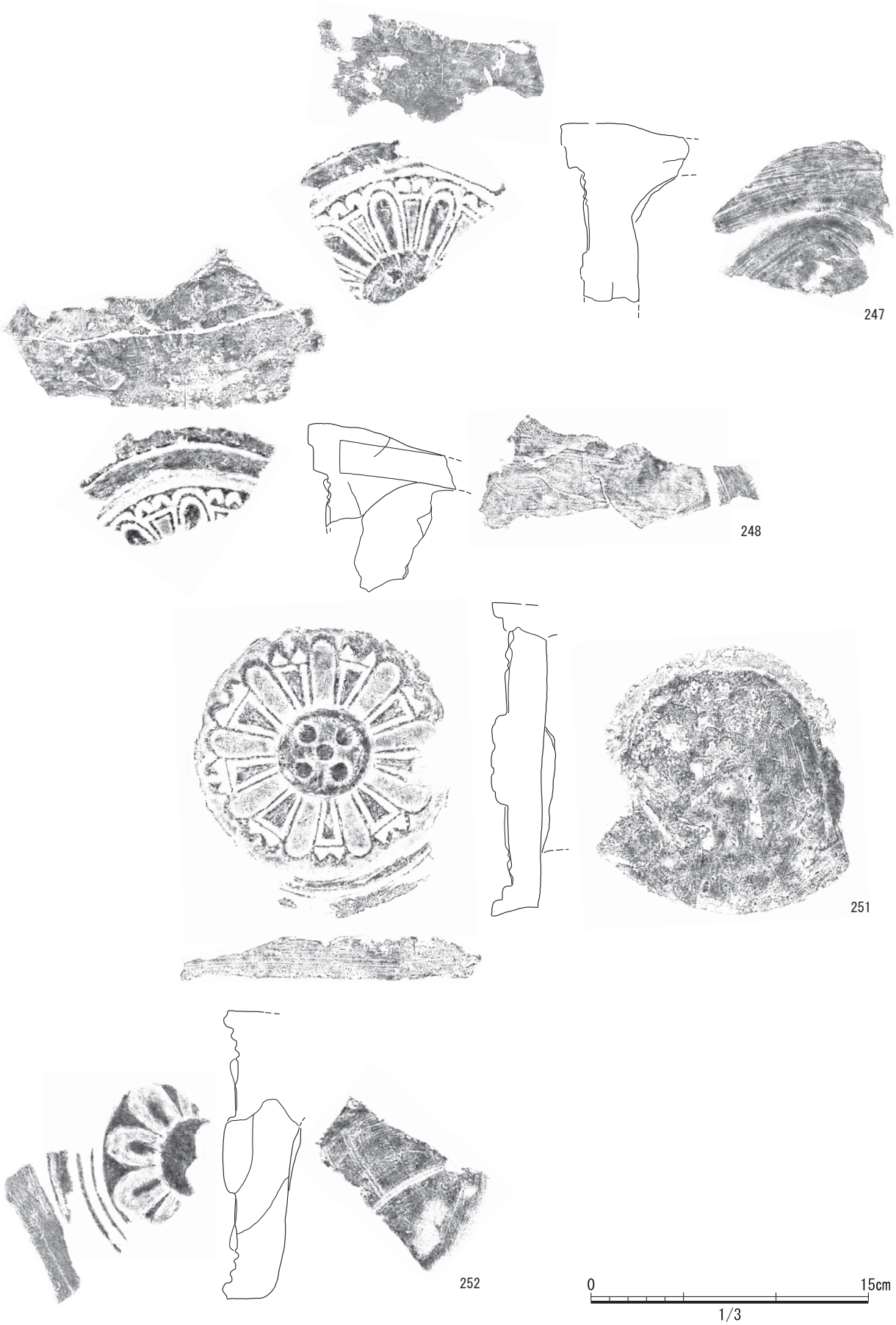
古川町上町字久中に所在し、宮川右岸の低位河岸段丘端部に、段丘崖に接して立地する。字久中と字芹田が接する地点に栗原神社が所在し、古くからその周辺で瓦が散布することが知られている（押上 1926、多賀 1941）。

2014 年度に実施した上町遺跡 39 次調査で瓦を含む多くの遺物と互層堆積の遺構を字久中と字芹田の境界の字久中側で確認した（三好 2015）。これまで、上町廃寺跡という名称の他に、久中廃寺など

とも呼ばれ、上町字大日から高山市国府町広瀬に及んで所在する塔ノ腰廃寺跡と区別されてきた（八賀 2001、三好 2016a など）。しかし、岡村利平による『吉城郡古瓦譜』に上町字久中小字塔ノ腰の地名が確認できる等の理由により、久中廃寺・塔ノ腰廃寺・上町廃寺をイコールとして所在地を検討す



第 20 図　上町廃寺跡遺物実測図 (1)

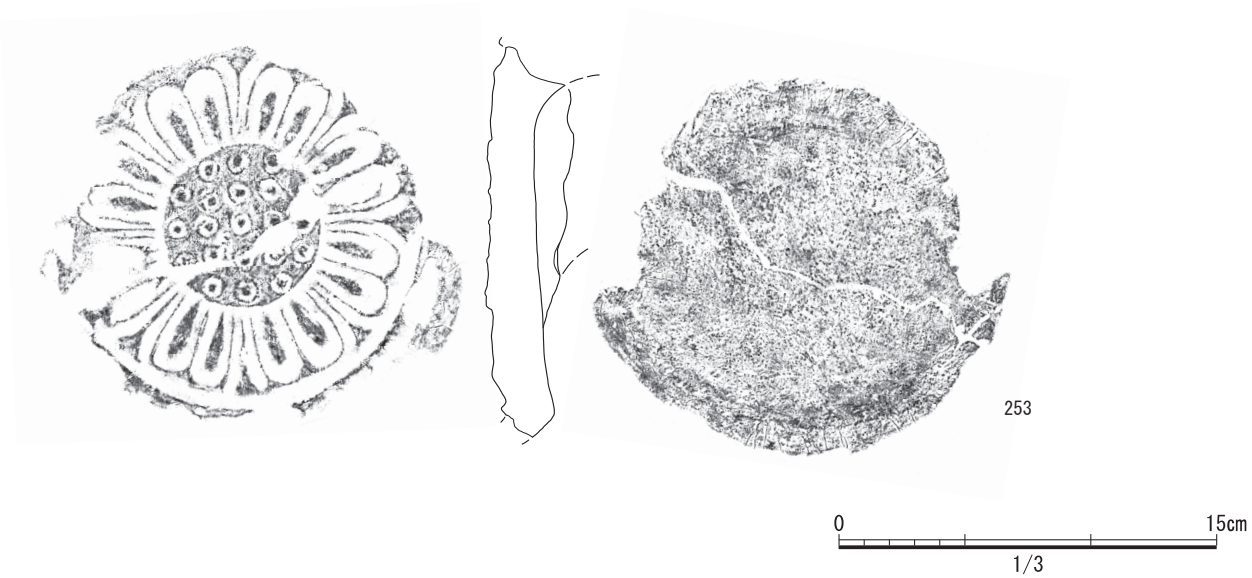


第 21 図　上町廃寺跡遺物実測図 (2)

べきとの意見がある（堀 2018）。確かに、岡村利平が「上町の産土神栗原神社東北に「久中」という字あり。(中略)久中の一に塔の腰あり、布目瓦を出す。」と記したとある(多賀 1941)。しかしながら、『飛州志備考』では「国分尼寺旧跡は吉城郡古川上町村広瀬村の内に亘る今も大日堂残れり」と記載されており、同一の遺跡と捉えている感もある（岡村編 1909）。いずれにしても、この重要な提言に十分に取り組めなかったため、今報告では上町廃寺跡と塔ノ腰廃寺跡を分けて報告し、今後の課題としたい。

今回は、上町遺跡として採集した遺物のうち上町廃寺跡範囲内のものと古川小学校より寄贈された「久中廃寺」と記載される資料、栗原神社所蔵資料から、須恵器 6 点（238 ～ 243）、灰釉陶器 1 点（244）、瓦 9 点（245 ～ 253）を図示した。

238 は瑳である。口縁部と体部の境に稜を有する。239 は天井部に回転ヘラケズリを施す杯 H 蓋である。天井部と口縁部の境に稜を持つ。240 は器高が低い器形の杯 H 身である。体部がゆるやかに内湾し、口縁部の立ち上がりは内傾する。239・240 は 7 世紀前半代のものと推定される。241 は杯 B の底部破片である。方形を呈する高台が、底部の内側に貼り付けられる。242 は体部がゆるく内湾し、口縁部で外反する。243 は壺の口縁部破片である。244 は灰釉陶器の底部破片である。高台が台形となり、長頸瓶と推測される。245 ～ 250 は有段素文縁単弁十弁蓮華文軒丸瓦である。円形の中房に 1 ＋ 4 の蓮子を配する。圏線と膨らみにより表される連弁と、2 つの連続鋸歯文が先端に付く三角形圏線で表される間弁からなる。丸瓦とは瓦当裏面上端で接合する。丸瓦部凸面はケズリを施す。瓦当側面と裏面は丁寧なナデを施す。246 では中房の付け根、247 では瓦当裏面に粘土の継ぎ目が見られる。251 は有段素文縁単弁九弁蓮華文軒丸瓦である。円形の中房に 1 ＋ 4 の蓮子を配する。圏線で表される平坦な蓮弁と、2 つの連続鋸歯文が先端に付く三角形の膨らみで表現される間弁からなる。瓦当側面と裏面は丁寧なナデを施す。252 は三重圏線文縁単弁九弁蓮華文軒丸瓦である。中房は円形である。蓮子は失われているが、他の資料からは 1 ＋ 6 であることが知られる。子葉を持ち、平らで弁端の丸い蓮弁を配する。瓦当側面と裏面は丁寧なナデを施す。253 は複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。円形の中房に 1 ＋ 8 ＋ 12 の蓮子を配する。蓮子は周環を持つ。瓦当裏面には丁寧なナデを施し、下半部が



第 22 図　上町廃寺跡遺物実測図 (3)

高まり状に残る。借用資料であるが、どのような経緯で所蔵に至ったかは不明とのことであったため参考資料としたい。

24　上町三塚 1 ～ 3 号墳（遺跡番号 21217-06489 ～ 06491）

古川町上町字久中に所在し、宮川右岸の低位河岸段丘に立地する。

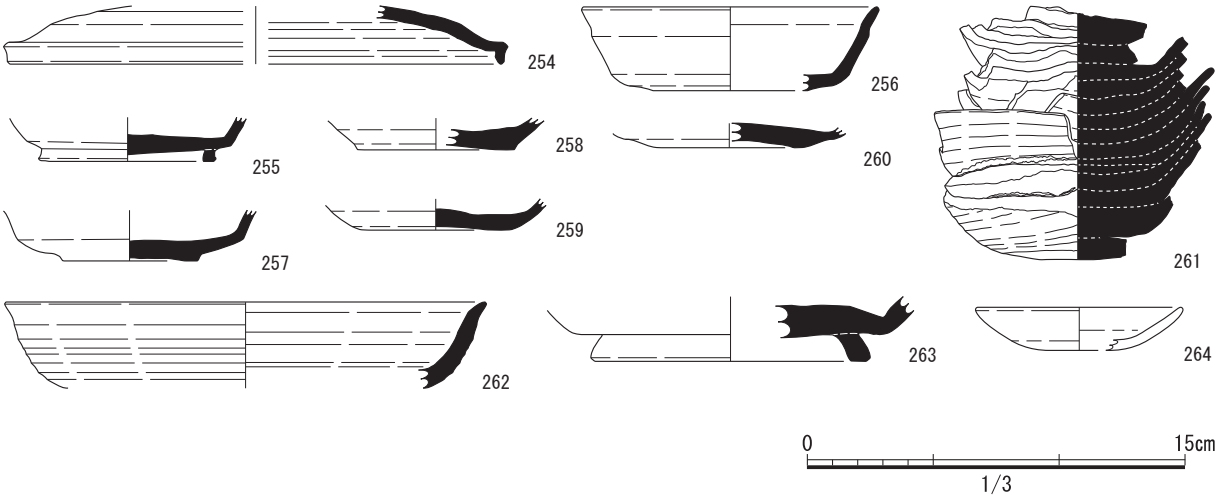
古くは『飛州志』に所在が記されている（岡村編 1909）。調査カードによると、佐藤泰郷により 1880（明治 13）年に調査が行われ、1959・60（昭和 34・35）年頃の土地改良工事の際に滅失したとされる。佐藤による調査成果は『薫菜園集』所収の「上町の古墳」にまとめられ、厚さ 6 ～ 9cm 程度の「板の如き石」が大小重ねてあったことや馬具の出土が記述されている（佐藤 1909）。そこからは、小口積みの横穴式石室であったことや、轡・杏葉の出土が知られる（石原 1992・八賀 1995）。

25　黒内古屋敷遺跡（遺跡番号 21217-11769）

古川町黒内字古屋敷に所在し、宮川支流殿川に注ぎこむ黒内川左岸の山麓緩斜面に立地する。当遺跡はすでにグラウンドの一部として造成済であるが、かつて当該地で採集されたとされる遺物を、2 名の方から寄贈された。遺物は須恵器古代器種 20 点、土師器皿 1 点、陶磁器 1 点、合計 22 点であり、今回は須恵器 10 点（254 ～ 263）、土師器 1 点（264）を図示した。

254 は口縁端部が垂下した蓋である。255 の杯 B は高台の貼付け位置が底部の内側になり、強く屈曲して立ち上がる。256 ～ 260 は底部に回転糸切り痕が残り、椀 A である。261 は椀 A の重ね焼き資料である。262 は器高が低く、口径が大きく盤と考えた。263 は腰部を有する盤の可能性が高い底部であり、火膨れしている。261・263 は窯資料の可能性も示唆させる。また、264 は中世土師器皿である。手捏ねのカワラケがあり、地名とともに背後の山頂部に位置する小鷹利城跡との関係も看取される。

これらから、古代においては窯跡、中世にはカワラケを使用するような小鷹利城跡と関わる遺跡の可能性が想定されるが、グラウンドとして造成済みの現状からは古代と中世の散布地としての登録が妥当と考えられる。



第 23 図　黒内古屋敷遺物実測図

26　黒内細野遺跡（遺跡番号 21217-06519）

古川町黒内字細野に所在し、宮川支流殿川に注ぎこむ黒内川と尾崎川に挟まれた河岸段丘端部に立地する。1998（平成 10）年に道路拡幅に伴う発掘調査を実施しており、竪穴建物跡 5 軒、土坑 121 基などを確認し、縄文時代中期から後期にかけての集落跡と判明した（飛騨市教委 2014）。調査以前でも縄文土器と、石棒など石器・石製品の遺物の出土が知られる（吉朝 1998a）。

遺物では、縄文土器 104 点、須恵器古墳時代器種 1 点、須恵器古代器種 8 点、土師器古代器種 1 点、灰釉陶器 2 点、瀬戸美濃焼 1 点、近世陶磁器 1 点、時期不明陶磁器 1 点、石鏃 4 点、石錐 15 点、楔形石器 24 点、削器 19 点、UF 等 51 点、剥片 132 点、石核 1 点、打製石斧 5 点、磨石等 1 点、その他石製品 3 点、合計 374 点を採集した。また、飛騨の山樵館では合併前の旧古川町時代に寄贈を受けた資料も保管されていた。今回は、縄文土器 1 点（265）、須恵器 3 点（266 ～ 268）、土師器 1 点（269）、土製品 2 点（270・271）、石器・石製品 20 点（272 ～ 291）、瓦 1 点（292）を図示した。

265 は無文の縄文土器である。266・267 は底部切り離しが回転糸切りの椀 A である。268 は口縁部が強く屈曲して端部が垂直に立ち上がる。器種は盤と推測されるが、小破片であり不明とした。269 は土師器甕である。270・271 は土製品であり、271 は有孔の耳飾と推測される。272 ～ 276 は石鏃である。272 ～ 274 は凹基無茎鏃、275 は平基無茎鏃、276 は平基有茎鏃である。277 は下端に微細な剥離で錐部を作り出す柱状の石錐である。278・279 は上下端に剥離が認められたため、楔形石器と推測される。280・281 はスクレイパーである。280 は下辺から左側面にかけて、281 は左側面に刃部を有する。282 ～ 285 は打製石斧である。282・283 の表面と 285 の裏面に自然面が残る。286・287 は磨製石斧である。286 は右側面に若干の敲打痕が認められ、敲石に転用した可能性がある。288 は表裏両面に敲打痕が残る凹石である。289・290 は石刀であり、全体に丁寧な研磨で仕上げられている。289 は有頭の完形品であり、290 は頭部を欠損する。291 は御物石器である。敲打によって凹凸の形状を作出し、研磨で仕上げている。292 は丸瓦である。凸面は縦方向にケズリを施し、敲きの痕跡は認められない。凹面には布目圧痕が残り、側縁側を面取りする。

古墳時代から古代の須恵器や、細片のため図示していないが中世瀬戸美濃焼が採集されていることから、古代の集落跡も今後見つかる可能性がある。しかし、現状では既往調査の成果から縄文時代の集落跡としての登録が妥当と考えられる。

27　袈裟丸祖父あん遺跡（遺跡番号なし）

古川町袈裟丸字祖父あんに所在し、宮川右岸の河岸段丘に立地する。

地名から寺院の存在が想定されたこともあった（多賀 1941）。

踏査では、山麓にほど近い段丘で遺物の散布が認められた。

遺物では、須恵器古代器種 39 点、瀬戸美濃焼 1 点、その他中世陶磁器等 2 点、近世陶磁器 2 点、時期不明陶磁器 1 点、合計 45 点を採集した。今回は須恵器 7 点（293 ～ 299）、土師器 1 点（300）、銅銭 1 点（301）を図示した。293 は杯 B であり、やや外を向く方形の高台を貼付する。294・295 は底部に回転糸切り痕が残る椀 A であり、295 は腰部がやや張る。300 は中世土師器皿、手捏ねカワラケである。301 は 1068 年に北宋で初鋳された熙寧元宝である。

遺物が散布するものの、一画からの最大の採集点数は 38 点であり、全体としては疎らであること、また聞き取りでもこれまで遺物が採集されたとの話がないため、現状では遺跡登録しないこととする。

第 24 図　黒内細野遺跡遺物実測図（1）

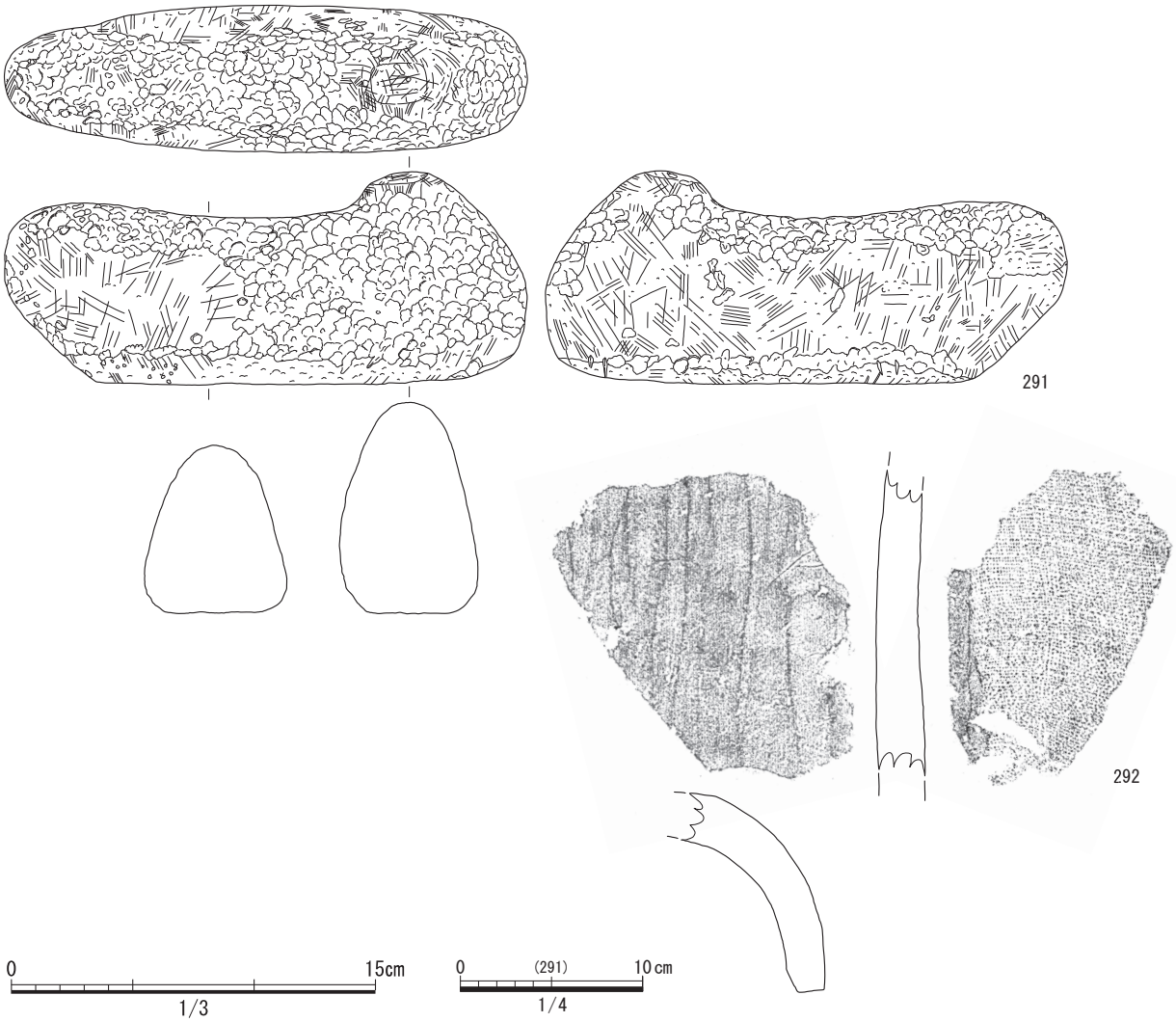
第 25 図　黒内細野遺跡遺物実測図 (2)

28　五阿弥塚古墳（遺跡番号 21217-00196）

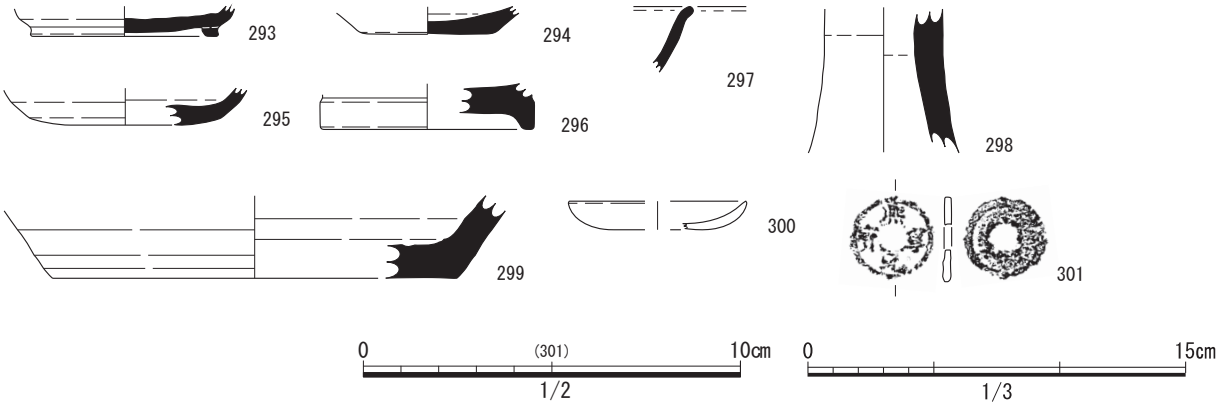
古川町向町字五庵塚に所在し、宮川右岸の低位河岸段丘に立地する。市指定史跡である。

江戸時代の地誌『飛州志』でも所在が知られる（岡村編 1909）。1884（明治 17）年、南側が開口する石室が偶然発見され、佐藤泰郷により調査された（佐藤 1909）。そこからは、勾玉・管玉・水晶などが、須恵器や鉄鏃などと共に見つかったことが知られる。図面からは小口積みの横穴式石室と想定され、6 世紀中頃に位置付けられる（河合 2015b）。

踏査では、遺物の確認はなかったが、飛驒の山樵館収蔵庫にアルプス薬品工業㈱から寄贈を受けた五阿弥塚古墳近辺出土と伝わる資料が収蔵されている。今回は参考資料として、須恵器 5 点（302 ～ 306）、石器・石製品 3 点（307 ～ 309）と、大洞平古墳群と同様に鉄鏃 1 点（310）を図化した。



第 26 図　黒内細野遺跡遺物実測図 (3)



第 27 図　袈裟丸祖父あん遺跡遺物実測図

302は高杯である。杯部は口縁部が内湾し、口縁部がゆるく外反する。脚部はハの字状に開く短脚のものである。303は広口壺である。外面の平行タタキに7条の横位沈線を施し、内面には同心円の当て具痕が残る。胴部から肩部、頸部にかけて丸みを持ち、口縁部は外反して開く。口縁端部には縁帯を巡らせる。304は広口壺である。胴部が欠損している。肩部に張りを持つように復元できる。口縁部はゆるく外反し、端部に縁帯を巡らせる。305は平瓶である。体部は上方より丸みを持ち、中央で最も張り出した後、下方へ下る。底部には平底に仕上げる。体部上面外面のほぼ中央に、把手を模して偏平な円形の粘土粒を一つ貼り付ける。口頸部は外反しながら開き、口縁端部は欠損する。306は横瓶である。外面の平行叩きに縦位沈線を施す。頸部はゆるく外反して開き、口縁部は内湾する。口縁端部に縁帯を巡らせる。307は、研磨により全体を仕上げるが、基部に横方向の磨痕で形成された括れを持つ。刃部には使用による剥離が見られるため、磨製石斧に分類した。308・309は不明石製品である。研磨により球状に仕上げられる。310は外反する腸抉を有する平根有頸鏃である。鏃身部の先端と腸抉が欠損する。

29　小坂神社跡古墳（遺跡番号21217-06500）

古川町下気多字小坂に所在し、宮川右岸の山腹に立地する。

踏査では、神社の造成に伴い削られている状況を確認した。墳形は円墳である。墳裾部の径18.0ｍ、墳頂部の長径16.0ｍ、短径13.0ｍを測り、高さ3.0ｍである。

30　小島城跡（遺跡番号21217-00164）

古川町沼町、杉崎、太江にかけて所在する。宮川とその支流太江川とに挟まれた山頂に立地する。現状は山林であり、一部が岐阜県史跡に指定される。

『飛州志』でも飛騨国司姉小路氏の居城とされ（岡村編1909）、その一角である小島氏が治めたとされる。現地には、尾根に沿って曲輪、切岸、堀切、土塁、虎口がよく残る（岐阜県教委2005）。また主郭からは盆地への眺望がよい。

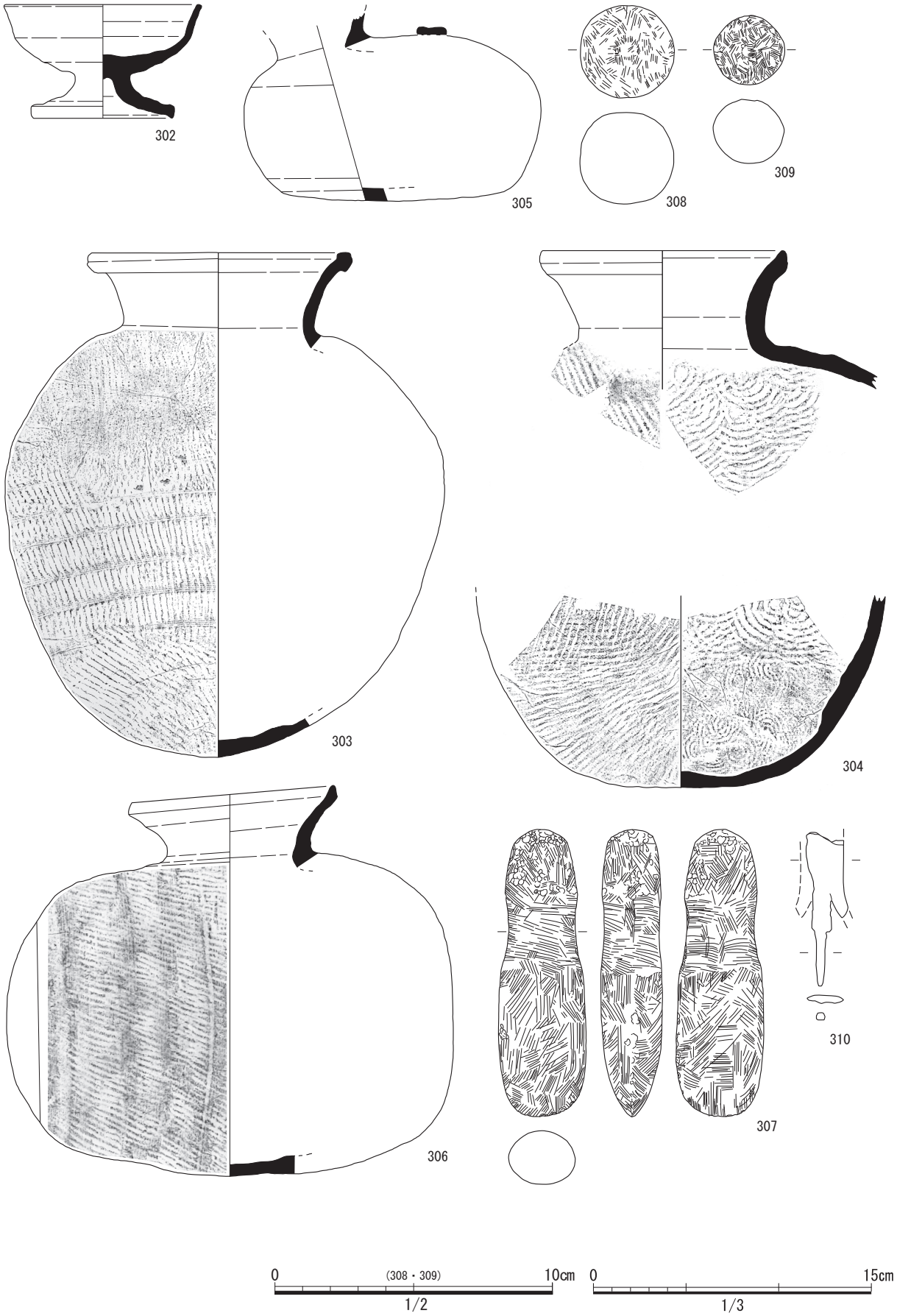
2018（平成30）年度に発掘調査を実施し、主郭盆地側のみ裏込めを伴う石垣を確認した（飛騨市教委2018c）。また、一画には算木積みの石垣が残っており、これらは金森氏による改修が想定される。

31　小鷹利城跡（遺跡番号21217-00146）

古川町黒内、信包、河合町稲越にかけて所在する。古川盆地から山間部へ移る山頂に立地する。現状は山林であり、一部が岐阜県史跡に指定される。

『飛州志』では飛騨国司姉小路氏の一族である小鷹利が治めたとする（岡村編1909）。向氏の別称「小鷹利」を称すことから、向氏の居城と推測される。1531（享禄4）年以後向氏は没落するため、三木氏が治めたと推察される。小鷹利城跡は白川郷方面から保峠・湯峰峠を越えて古川盆地へ侵入する敵を迎え撃つ場所に立地する。主郭の西側の斜面にはある数十本の畝状空堀群は、峠を越える敵に対処するためのものだったと考えられる（岐阜県教委2005）。

踏査では、曲輪、切岸、堀切、土塁、虎口、畝状空堀群がよく残る状況を確認した。畝状空堀群は三木氏による改修と想定される。



第 28 図　五阿弥塚古墳遺物実測図

32　**小沼遺跡**（遺跡番号なし）

古川町増島町に所在し、宮川とその支流荒城川とに挟まれた沖積地に立地する。

遺物では、須恵器古代器種 32 点、中世陶磁器等 1 点、合計 33 点を採集した。今回は須恵器 11 点（311 ～ 321）を図示した。312 は杯 G 蓋であり、口径が推定 11cm と比較的大きいため 7 世紀後半から末のものと考えられる。313 は擬宝珠形状が崩れた摘みであり、312 のような杯 G 蓋に伴うものと想定される。315 ～ 317 は、口縁端部が垂下する杯 A もしくは杯 B 蓋の口縁部片である。319 は椀 A であり、体部が直線的に立ち上がる。320 は回転糸切りによる切り離しの後、高台を貼付した椀 B である。これらは概ね 8 世紀後半のものと推定される。

7 世紀後半、8 世紀後半という 2 時期の須恵器が散布するものの、最も多く採集できる一画でも遺物が 26 点であり、また聞き取りでも遺物が採集されたとの話がないため、現状では遺跡登録しないこととする。

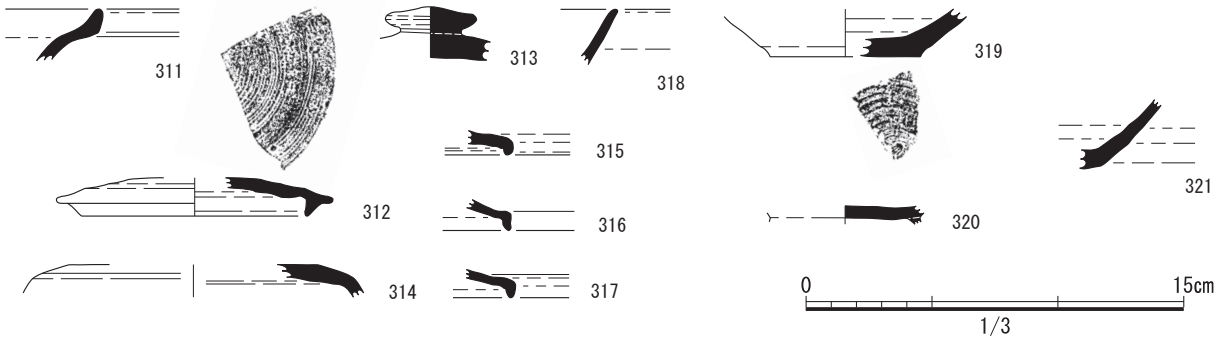
33　**御番屋敷遺跡**（遺跡番号 21217-00152）

古川町太江字御番屋敷に所在し、宮川支流太江川右岸の河岸段丘端部に立地する。県史跡である。

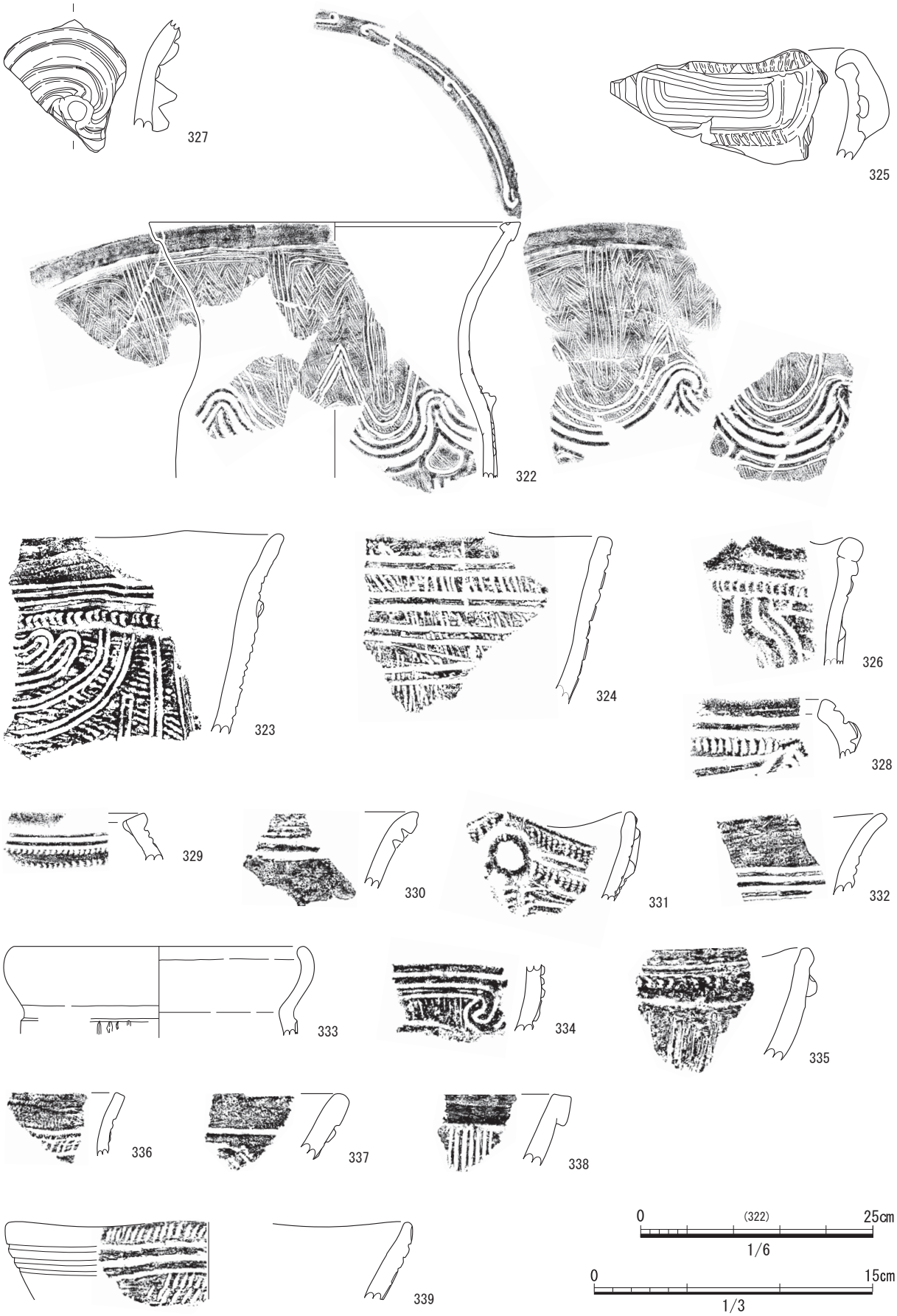
1954（昭和 29）年に縄文時代中期の竪穴建物跡を発掘調査で確認した（細江村郷土史研究会 1956）。それを根拠に 1959（昭和 34）年に岐阜県史跡に指定されている（大野 1963a）。これらに際して一部の資料がデータ化され、千代の松原公民館に保管されていた。今回改めて資料確認を行ったところ、同一個体と認められるものや須恵器等も保管されていたため、既報告のものも含めて再報告を行う。

当遺跡は 1954 年の開田時に発見された。調査されたのは 7 番目に見つかった炉跡と竪穴建物跡だったと伝わる。遺物の出土と層序との関連は薄かったとされるが、床面出土とされる遺物群も記録されている（細江村郷土史研究会 1956）。このため、ここでは遺物の大分類を行い、最後に床面出土とされる遺物群から調査した遺構の年代観を述べたい。

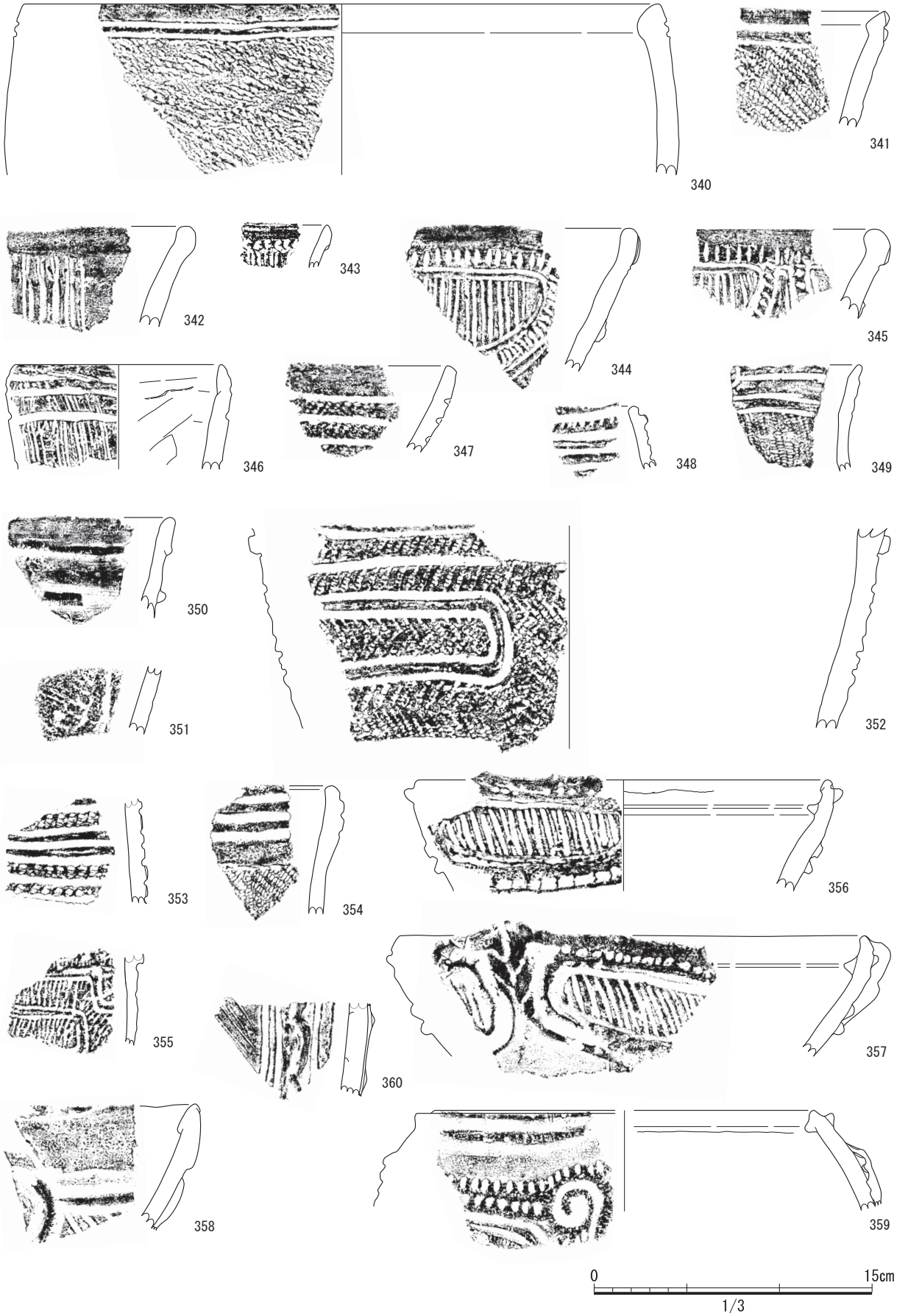
322 ～ 412 は縄文土器・土製品である。322 ～ 331 は半截竹管状工具により施文される古串田新式併行期の縄文時代中期中葉のものと考えられる。322 は半隆起線により区画を設け、区画内は矢羽根状にヘラ状工具で施文する。胴部に 3 条の隆起線で連弧状文を施し、下半部には条線を施す。口唇部には沈線により渦巻文を施す。326 は半截竹管状工具により、328 はヘラ状工具により、331 は櫛歯状工具により基隆線に刺突を施す。344 ～ 355 は隆帯と沈線による施文から串田新式併行期の縄文時代中期後葉のものと考えられる。344・345 は櫛歯状工具によるキザミを施した隆帯によって楕円



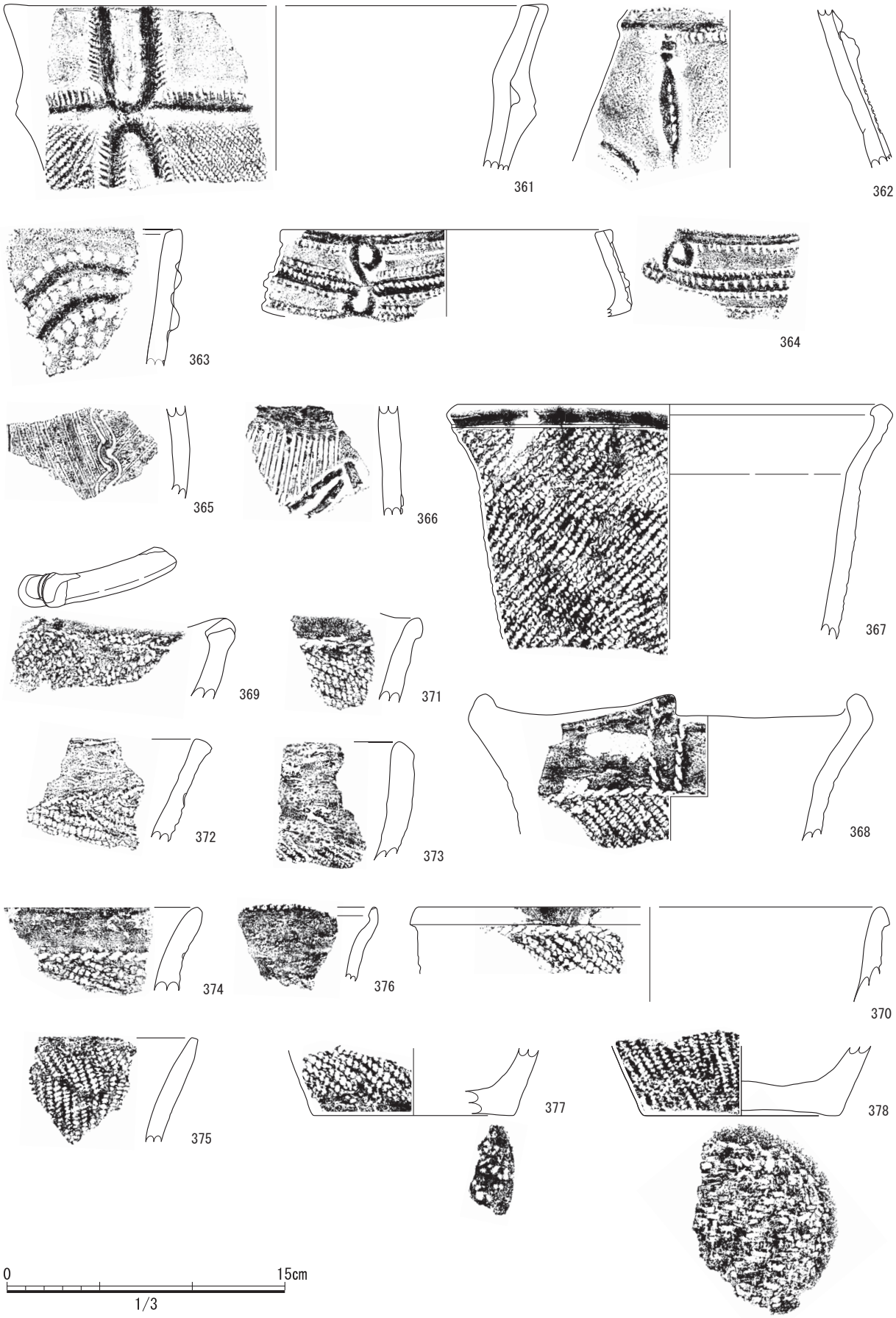
第 29 図　小沼遺跡遺物実測図



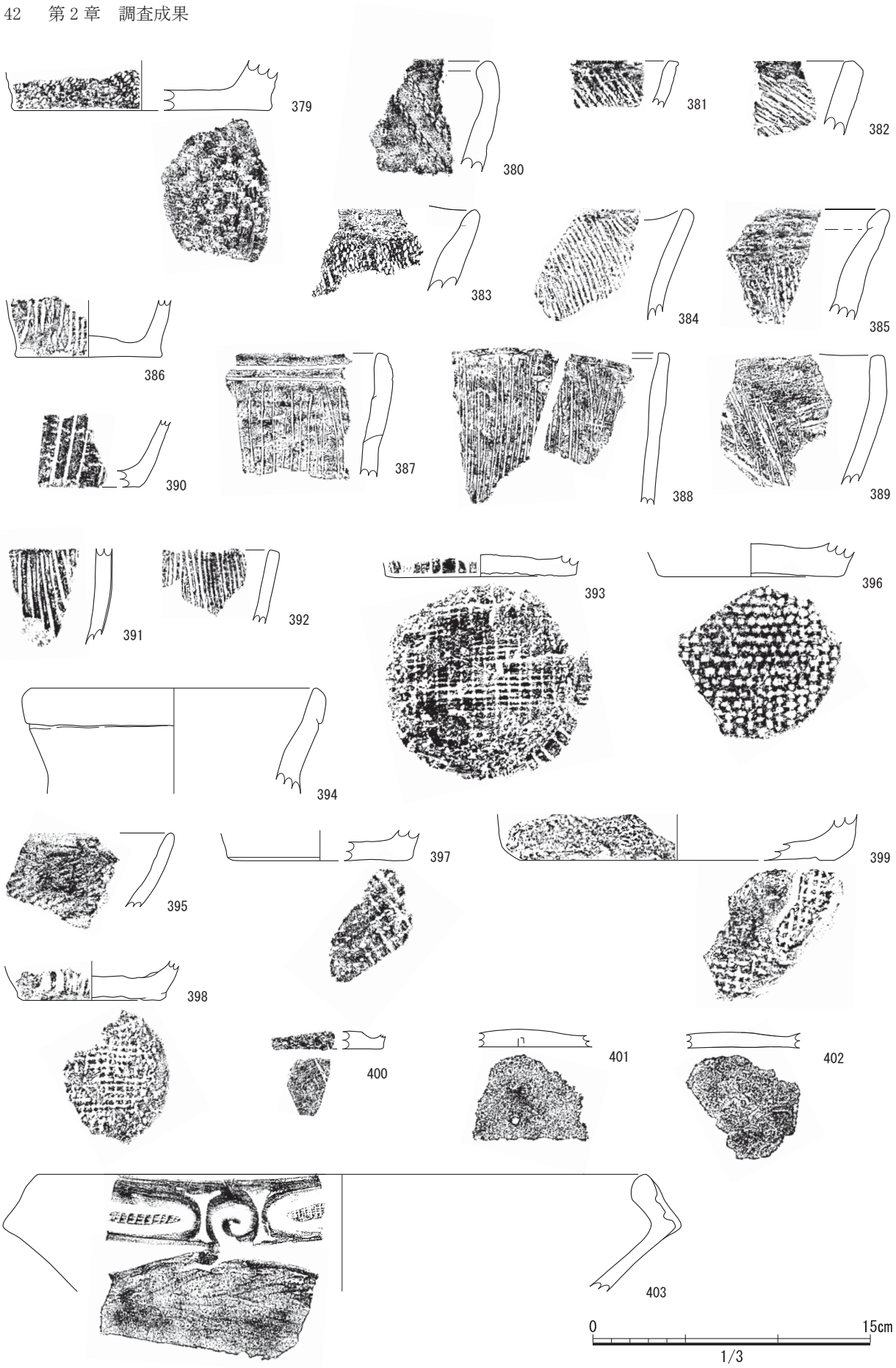
第 30 図　御番屋敷遺跡遺物実測図 (1)



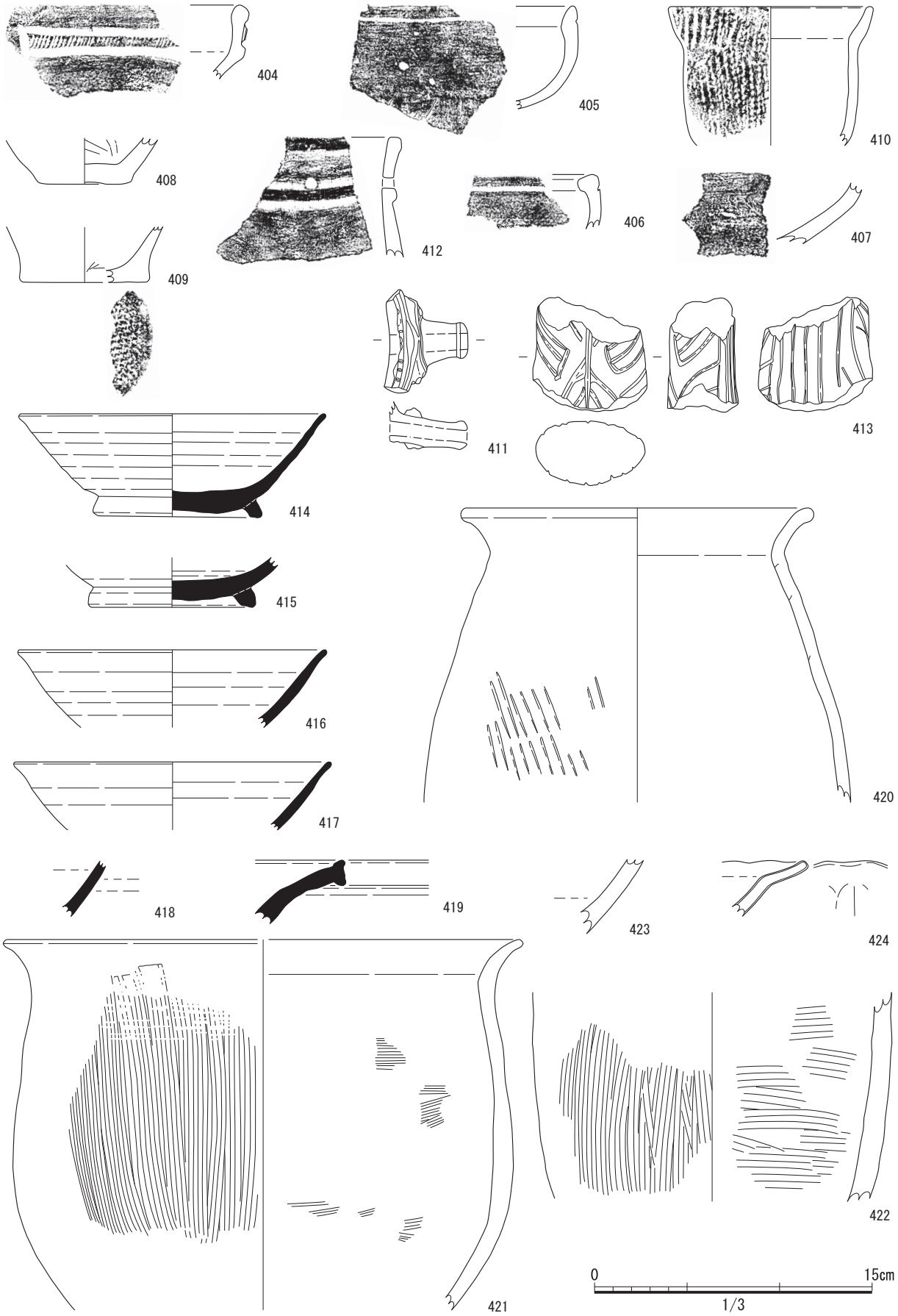
第 31 図　御番屋敷遺跡遺物実測図 (2)



第 32 図　御番屋敷遺跡遺物実測図 (3)

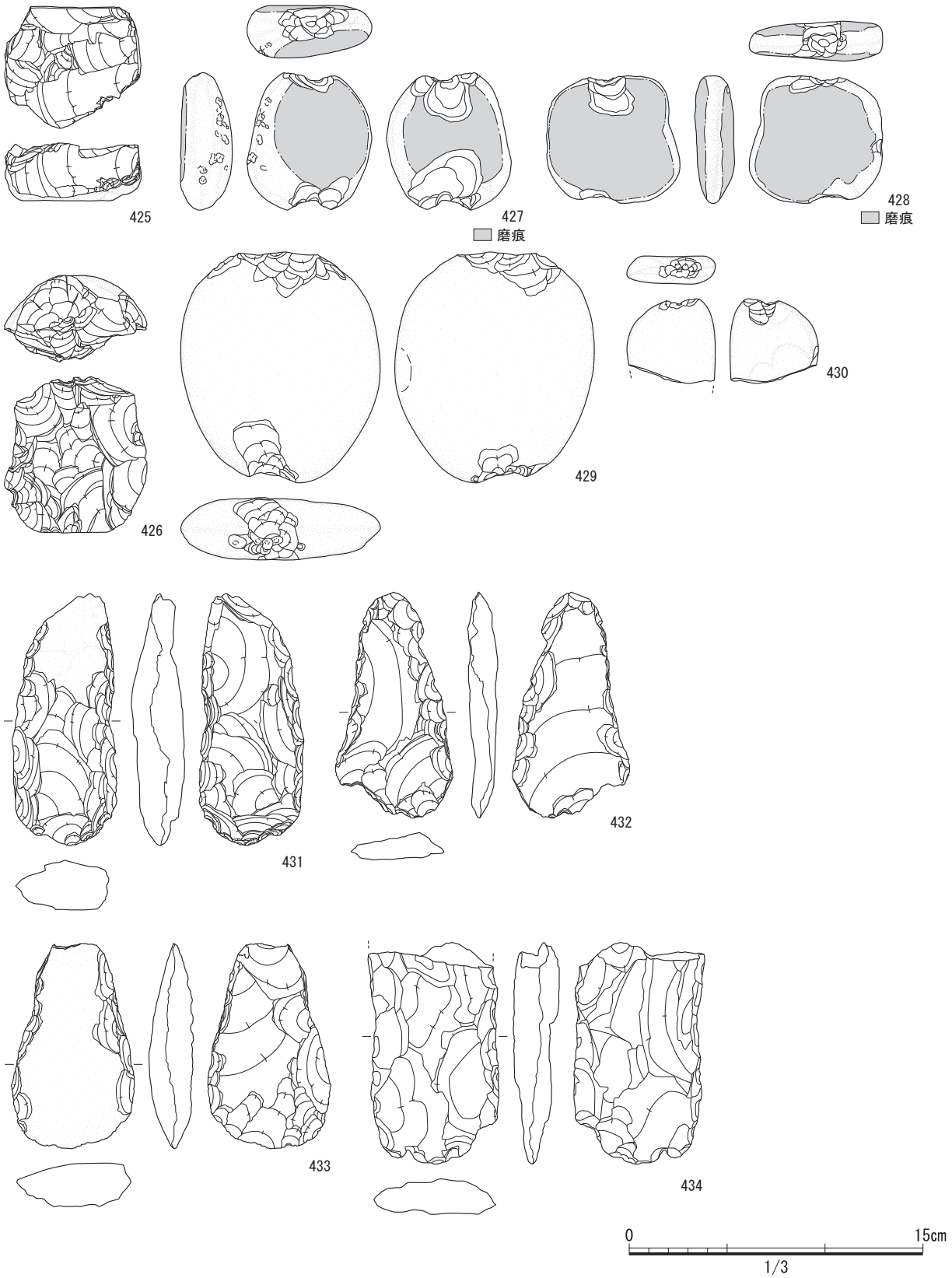


第 33 図　御番屋敷遺跡遺物実測図 (4)



第 34 図　御番屋敷遺跡遺物実測図 (5)

区画を設け、区画内に縦位の沈線を充填する。同一個体と考えられる。356 ～ 369 は信州系の中期のものと考えられる。356・357 は口縁部が内湾する器形を持ち、口縁下 2 本の隆線間を短沈線で連続して施文する。358・359 は隆線により唐草文を施す。これらは唐草文系第 3 段階の中期後半のもの



第 35 図　御番屋敷遺跡遺物実測図 (6)

と考えられる。361 は口縁部が直線的に開く器形である。開き始める位置に横位隆帯を貼り付ける。その隆帯を境に口縁直下の無文帯と縄文地の胴部に U 字状の隆帯を貼り付ける。隆帯の脇にはヘラ状工具によるキザミを施す。362 は搾られた位置に横位隆帯を施す胴部破片である。隆帯脇には半截竹管状工具によるキザミを施す。ともに井戸尻式期のものと考えられる。364 は内折する口縁部に横位隆帯と渦巻文を施す。369 ～ 380 は縄文を、381 ～ 386 は拠糸を、387 ～ 393 は条線を地文とする。394･395 は無文である。376 は口縁部が内湾させて口唇部にキザミを施し、気屋式に比定できる。396 ～ 402 は底部破片である。396 は 1 超 1 潜 1 送の網代圧痕、397 ～ 399 はスダレ状圧痕、400 は葉脈状圧痕が遺存する。401・402 は無文であり、401 には種子圧痕が残る。403 ～ 408 は浅鉢である。403・404 は隆帯に渦巻文と横長の区画文を施し、区画内に櫛歯状工具による刺突を充填する。古串田新式に比定できる。409・410 は口縁部が外反する小形土器である。411 は注口土器で晩期のもの、

第 36 図　御番屋敷遺跡遺物実測図 (7)

412 は有効鍔付土器で中期のものである。413 は沈線で施文する土偶片である。

414 ～ 419 は須恵器である。414・415 は底部回転糸切り後に高台を貼付する椀 B である。414・416・417 は口縁が開き気味に立ち上がり、端部は緩く外反する。8 世紀後半のものと推定される。これらは 420 ～ 422 の土師器甕と共に一括性が高い遺物の可能性がある。424 は青磁輪花皿であり、体部外面に鎬蓮弁文を施す。

425・426 は石核である。427 ～ 430 は上下端を打ち欠いた石錘である。427・428 には表裏面に磨面が残る。431 ～ 434 は打製石斧であり、431・433 には表面に自然面が残る。435 ～ 438 は磨製石斧である。435・436 は欠損した部分を研磨して刃部を作出し直している。439 は表裏面と側面に磨面が残り、表面には敲打痕も見られる。敲石として使用を終えた後に磨石として使用したものと推測される。440 は下端に敲打痕が顕著な敲石である。磨製石斧を転用したものと推測される。441 は凹石である。全面に磨面が残り、表裏面と側面の中央に敲打痕が残る。磨石を転用したものと推測される。

遺構出土の遺物について触れると、層序との関連性は薄いとされながらも竪穴建物跡床面において、トレンチで区切った南東地区で 374・343・345・342・338・330・366・405・395・401・402・390・396・378 が、南西地区で 332・372・368・367・376 が出土したとされる（細江村郷土史研究会 1956）。これらから、調査が行われた竪穴建物跡は古串田新式期から串田新式期であり、縄文時代中期中葉から後葉の時期と考えられる。

以上のように、遺物は縄文時代中期中葉から後葉が中心であり、早期・前期の資料も存在したようである。また、古代と中世のものも見られた。遺跡は、縄文時代・古代・中世の散布地と考えられる。

34　笹ヶ洞上番場遺跡（遺跡番号 21217-06520）

古川町笹ヶ洞字上番場に所在し、宮川の支流殿川左岸の丘陵裾部に立地する。

調査カードでは、土地改良で滅失したと記録されている。過去には、隣接する字津武里においてヒスイ製大珠が見つかったと知られる（吉朝 1998）。踏査では遺物の確認は無かった。縄文時代の散布地と考えられる。

35　笹ヶ洞川原遺跡（遺跡番号 21217-06521）

古川町笹ヶ洞字川原に所在し、宮川の支流殿川左岸の河岸段丘に立地する。

調査カードでは、土地改良で滅失したと記録されている。踏査では遺物の確認は無かった。

縄文時代の散布地と考えられる。

36　笹ヶ洞石灰窯跡（遺跡番号なし）

古川町笹ヶ洞に所在し、宮川の支流殿川に面した丘陵裾部に立地する。

底部の幅 1.9 m・奥行き 1.8 m、盛土の幅 3.4 m・奥行き 2.1 mを測り、高さ 2.3 mである。石を積み上げた竪穴状の窯跡であり、1929（昭和 4）年まで使用された。原形のまま保存されおり、市の史跡に指定されている。

37　沢遺跡（遺跡番号 21217-00194）

古川町上気多字沢に所在し、宮川右岸の山麓裾部に立地する。市史跡に指定されている。下位段丘

には上気多遺跡が所在し、また上方の山間部でも太型蛤刃石斧が見つかっている（どっこいし編集部 2010）。

沢遺跡は、旧古川町史編さん事業の分布調査で大野政雄が発見した。1964（昭和 39）年に予備調査が行われ、1967（昭和 42）年に発掘調査が行われた（第 1 次調査）。その結果、竪穴建物跡 1 軒が見つかり、土器は押型文土器の中でも最古段階に位置づけられ、「沢式土器」として学会に知られることになった（大野・佐藤 1967）。その後、1986（昭和 61）年に大野と岡本東三を中心に第 2 次調査が行われた。そこでは既往調査も踏まえて資料整理がなされ、縄文時代早期押型文土器の最古段階となる「沢式土器」の標識資料が報告された（飛騨市教委 2017a）。

現地は埋め戻され、保存されている。

38　沢廃寺跡（遺跡番号 21217-06086）

古川町上気多字沢に所在し、宮川右岸の河岸段丘端部に立地する。

古くから瓦が発見され、古川小学校で保管展示されてきたため、地元では古代寺院として認識されていた（多賀 1941）。また寿楽寺廃寺跡と同笵の軒丸瓦が見つかっていることも知られる（八賀 2001、三好 2016）。しかしながら、包蔵地カードによると岐阜県立吉城高等学校建設により滅失したと記録される。現在でも吉城高等学校グラウンド下の畑では、須恵器や瓦片等が採集され、上気多遺跡として登録されている。

今回は、借用資料と寄贈資料から、瓦 4 点（442 ～ 445）を図化した。442 は有段素文縁素弁八弁蓮華文軒丸瓦である。八角形の中房に 1+4 の蓮子を配置する。花弁は凹弁であり、区画する凸線は弁端近くで扇形に広がる。丸瓦部凸面には縦方向のヘラケズリを施す。瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけて連続する布目が認められる。瓦当裏面下端部に 2cm ほどの高まりが残る。中房に笵傷があり、寿楽寺廃寺跡で出土する軒丸瓦Ⅰ型式と同笵である。443・444 は丸瓦である。ともに凸面に丁寧なヘラケズリを施し、凹面に布目圧痕が認められ、側板連結模骨痕は確認できない。どちらも粘土重ね合わせ目は S である。443 の凹面には布の綴じ合わせ目が見られる。445 は平瓦である。凹面に布目圧痕と側板連結模骨痕がみられる。凸面には太平行タタキと指頭圧痕が残る。

丸瓦には 1934（昭和 9）年に上気多字沢で採集されたと記録されている。現在でも近隣で古代の須恵器と瓦片を採集できることから、古代寺院であった可能性が高く、古代の寺社跡と考えられる。

39　塩屋遺跡（遺跡番号 21217-00145）

古川町信包字塩屋に所在し、宮川の支流殿川に注ぐ支谷で形成された河岸段丘に立地する。

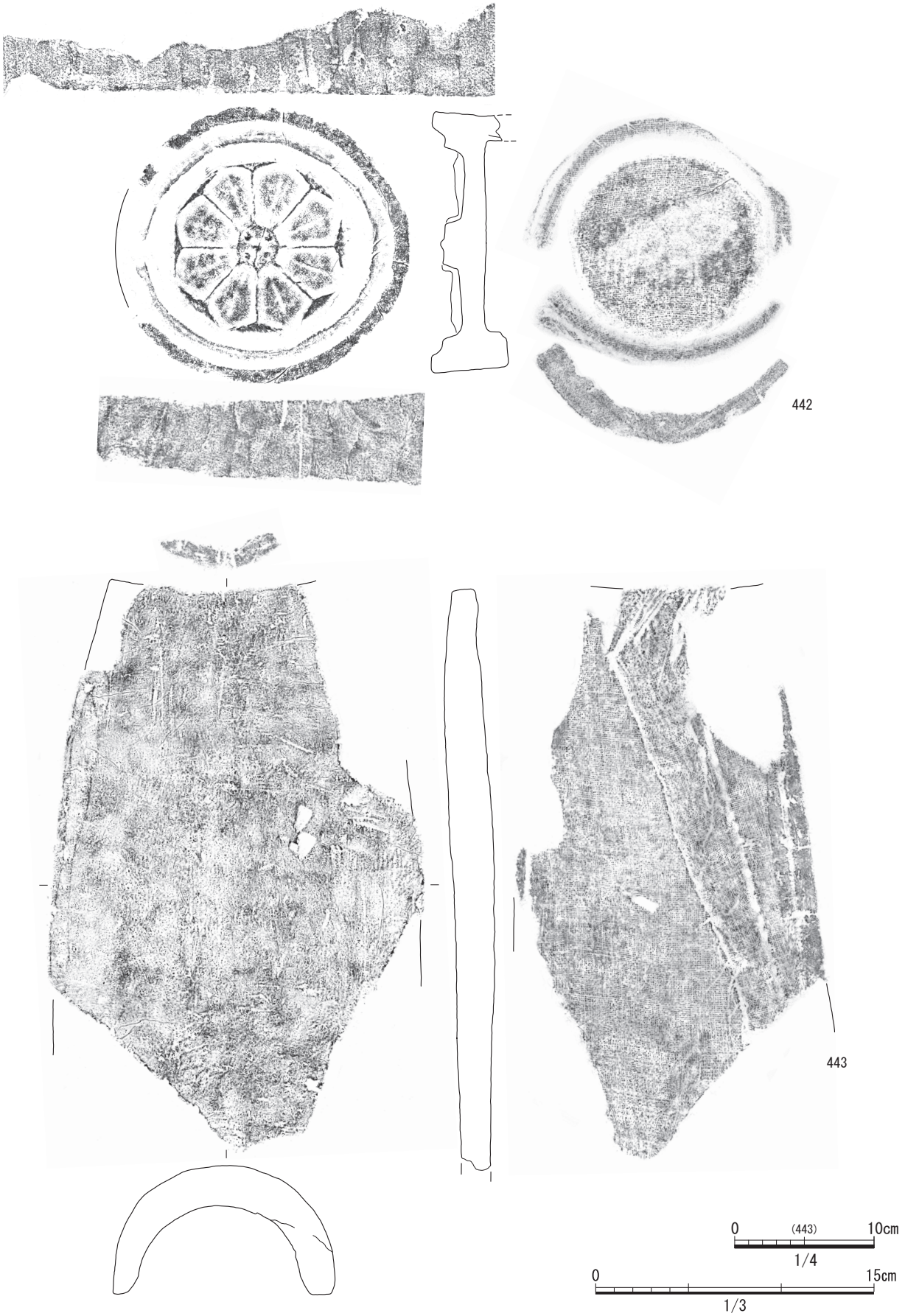
調査カードには、縄文時代早～中期の縄文土器と石鏃、打製石斧などの石器・石製品の出土が記録される一方、土地改良により滅失したとされる。過去には、環状石斧の出土が知られる（土田 1970、高山市教委 1986・1987）。踏査では遺物の確認は無かった。縄文時代の散布地と考えられる。

40　下気多川原遺跡（遺跡番号なし）

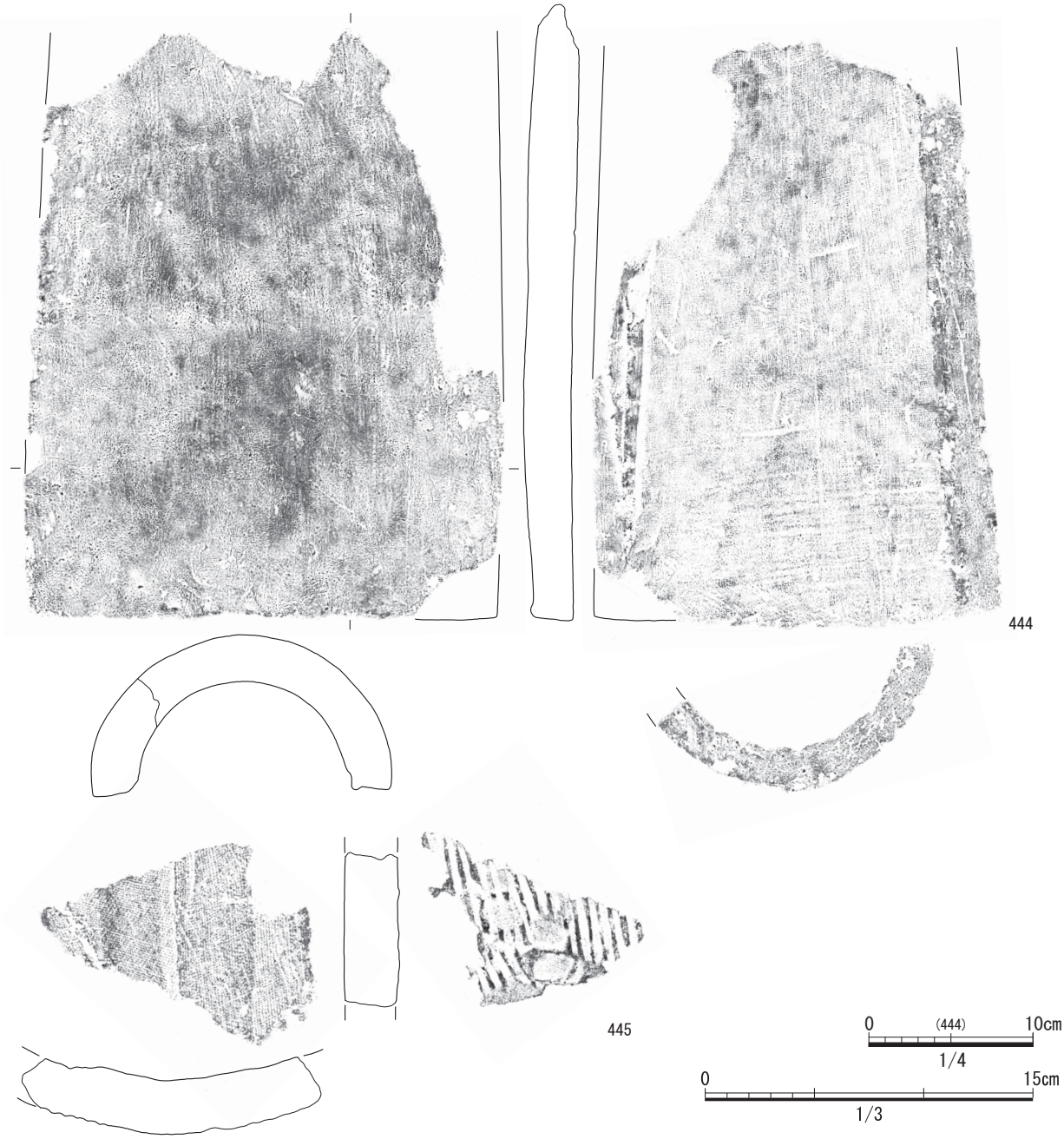
古川町下気多字川原・字野中に所在し、宮川右岸の河岸段丘に立地する。

踏査では、水田地の広い範囲で遺物が散布している状況を確認した。

遺物では、縄文土器 8 点、須恵器古墳時代器種 2 点、須恵器古代器種 30 点、土師器古代器種 4 点、



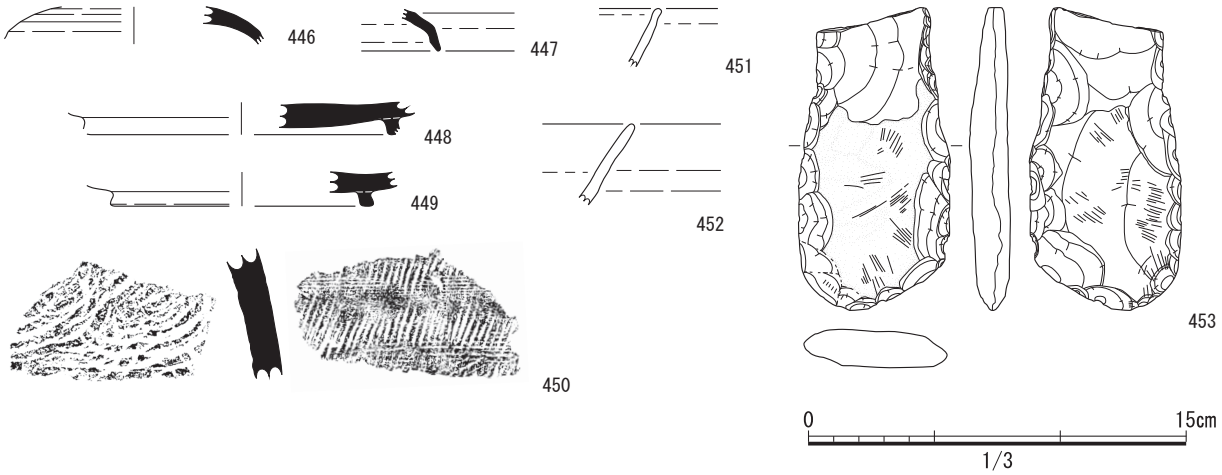
第 37 図　沢廃寺跡遺物実測図 (1)



第 38 図　沢廃寺跡遺物実測図 (2)

灰釉陶器 3 点、瀬戸美濃焼 1 点、珠洲焼 1 点、その他中世陶磁器等 2 点、時期不明陶磁器 2 点、合計 53 点を採集した。今回は、須恵器 5 点（446 ～ 450）、灰釉陶器 2 点（451･452）、打製石斧 1 点（453）を図示した。446・447 は蓋の破片である。ともに天井部にヘラケズリを施し、杯 H 蓋と考えられる。448・449 は杯 B である。方形の高台が貼り付けられ、8 世紀前半のものと推定される。450 は内面に当て具痕、外面に敲き痕が残る甕破片である。451・452 は口縁端部が丸く収まる灰釉陶器椀と考えられる。

古墳時代と古代という 2 時期の須恵器が散布するものの、土地改良された場所で採集遺物は客土の可能性もあること、また地形復元から遺跡範囲の確定が難しいこと、さらに聞き取りでも遺物が採集されたとの話がないことから、現状では遺跡登録しないこととする。



第 39 図　下気多川原遺跡遺物実測図

41　下北城跡（遺跡番号 21217-06084）

古川町下気多字丸山に所在し、古川盆地を望む山稜尾根に立地する。同じ尾根続きで、西 1.1 ｋｍには小島城跡が位置する。主郭平坦地の東側には堀切を設け、西側には防御施設はない。このため、小島城跡との密接な関係が想定される（岐阜県教委 2005）。

踏査では、曲輪・切岸など良好な残存状況を確認した。遺物の散布は認められなかった。

42　下気多山崎遺跡（遺跡番号なし）

古川町下気多字山崎に所在し、宮川右岸の山麓裾部に所在する。

踏査では、山麓の一画で遺物の散布が認められたが、聞き取りでは、遺物の出土が無かった点や遺物の散布の密度が薄いことから、遺跡登録無しとする。

43　下野長洞古墳（遺跡番号 21217-11770）

古川町下野字長洞に所在し、古川盆地を望む山地尾根に立地する。

墳形は円墳である。墳裾部の長径 12.7 ｍ、短径 7.0 ｍ、墳頂部の長径 5.0 ｍ、短径 3.8 ｍを測り、高さ 2.5 ｍである。墳頂部に縦 1.6 ｍ、横 1.0 ｍの窪みがある。また裾部に括れがある。

44　下野羽根坂古窯跡（遺跡番号 21217-06525）

古川町下野字中山に所在し、宮川左岸の南向き丘陵先端に位置する。

かつて、瓦土場の原料採取をしていた際に、断面で高さ 1.2 ｍ、幅 0.9 ｍほどの半楕円形の窯跡 2 つが見つかったという（福田 1935）。

踏査では、遺物の採集はなかったが、飛驒の山樵館収蔵庫に保管されていた資料及び地元の方が周辺で採集したとされる借用資料を調査することができた。借用資料は戦前に集められたもので、うち 19 点は 1993（平成 5）年に㈱玉川文化財研究所の河合英夫氏により調査がなされ、実測も終えていた。このたび実測図の提供を受け、所見についてご教示を賜った。今回は、河合氏による実測図に新たに古代の遺物 4 点を加え、須恵器 18 点（454 ～ 471）、灰釉陶器 1 点（472）、近世陶器 1 点（473）、現代遺物 1 点（474）、瓦 3 点（475 ～ 477）、鴟尾 1 点（478）を図示した。